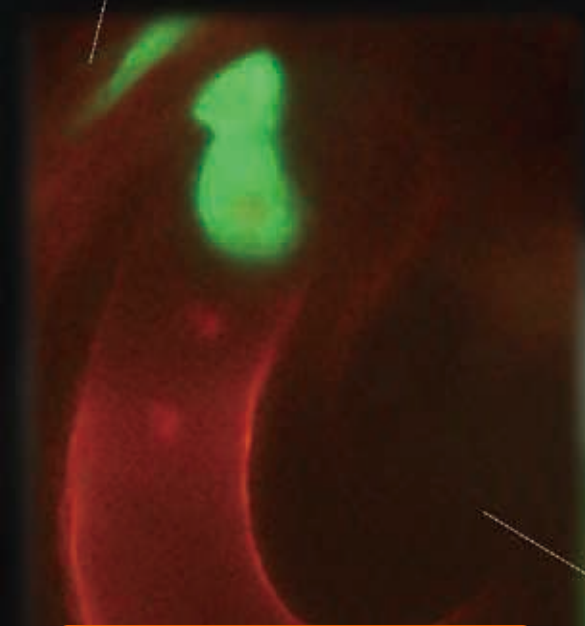
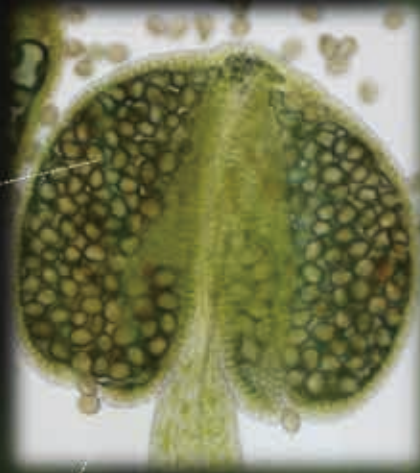
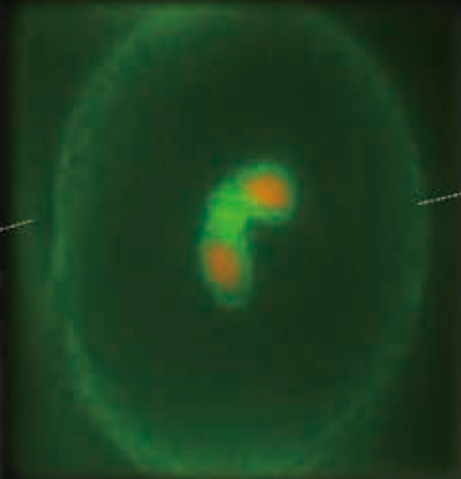
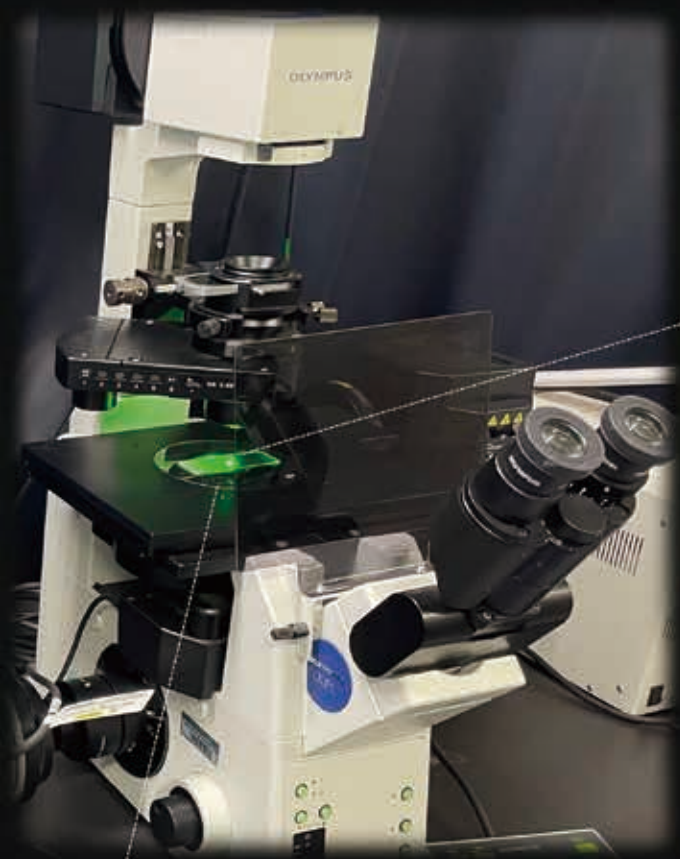


戸定会会報

〈千葉大学大学院園芸学研究科・園芸学部〉



シロイヌナズナ

2023

CONTENTS

特集 宇宙園芸研究センターの紹介 … 2	令和5年度 戸定会役員 …………… 16	令和4年度 卒業・修了生の進路 ……… 23
会長ご挨拶 …………… 5	令和5年度 戸定会理事会総会報告 …… 17	令和4年度 戸定会寄付者ご芳名 ……… 24
研究院長ご挨拶 …………… 5	会計報告 …………… 18	同窓生探訪③ …………… 25
退職のご挨拶 …………… 6	就職支援について …………… 19	ホームカミングデー …………… 26
新任のご挨拶 …………… 9	会員計報 …………… 19	研究紹介 …………… 27
学科近況 …………… 11	学生の声 …………… 20	園芸学部あれ!これ!(その8) ……… 28
支部だより …………… 14	国際交流 …………… 21	戸定会より寄付のお願い …………… 28
卒業生だより …………… 15	令和4年度 学術振興委員会報告 ……… 22	編集後記 …………… 28

宇宙園芸研究センターが園芸学研究院附属として2023年1月に設立され、同年5月17日に100周年記念戸定ヶ丘ホールにて開所式が開催されました。中山俊憲学長はじめ、学内外の来賓の臨席・祝辞を賜り、式典、センター看板の除幕式、記念シンポジウムが実施されました(写真1)。センターの発足と活動内容はテレビ・新聞等の多くのメディアによって紹介され、幅広い領域・各界で関心の高さがうかがわれました。センター設立のためにご尽力されました松岡延浩園芸学研究院院長をはじめとする関係者の皆様、そして、ご協力いただきました加藤一郎戸定会会長に、深く感謝申し上げます。



写真1 宇宙園芸研究センターの開所式に引き続き、中山学長の署名を基に作製されたセンター看板の除幕式が行われました。右から松岡院長、中山学長、筆者。

植物が重力に応答して茎頂を上、根を下に伸ばし、それぞれの働きをすることはよく知られています。これは重力屈性と呼ばれ、特定の細胞が重力を感知して、その生体情報が伸長領域に偏差的に運ばれる結果として、組織の上側と下側の伸長速度に差が生じることによって誘導されます。植物が重力によって影響される成長現象は重力形態形成と呼ばれ、重力屈性もそのひとつです。また、重力応答と独立した成長現象でも、重力屈性などによって影響を受ける場合があります。そのような重力影響を理解するために、これまでスペースシャトルや国際宇宙ステーション (ISS) などの宇宙船を利用した植物実験が実施されてきました。地球上で重力を利用して生きるように進化した植物が、宇宙の微小重力環境でどのように成長するのか、その一端を私たちの宇宙実験からみてみましょう。

写真2のとおり、イネの種子をロックウールに播種してISSの日本の実験棟「きぼう」で発芽させると、密閉された容器の中では、根が飛び出して伸び、地上部(幼葉鞘)の伸びる方向も一定ではありません。これに回転装置を使って人工重力を付与すると、根は培地から飛び出すことなく、また、正常品種の地上部は人工重力と反対方向に揃って伸びます。一方、重力感受性が小さい突然変異体の地上部は、やや重力方向か

らずれて伸びます。このように、植物は重力を感知して伸びる方向を決めていることがわかります。



写真2 イネ芽生えの重力応答 一微小重力下では伸びる方向が定まらない一

写真左：各容器内の左側にイネ正常品種6個体、右側に地上部の重力感受性の小さい突然変異体6個体を播種して給水後、100時間目の芽生え。上段は微小重力区で、根が培地から飛び出し、地上部(幼葉鞘)の伸びる方向も定まらない。一方、人工重力区では(下段)、根は培地から飛び出すことなく下側に伸びて、また、正常品種(左の6個体)の地上部は人工重力と反対方向に揃って伸び、突然変異体では個体によって地上部が重力方向からわずかにずれて伸びる。矢印(G)は、人工重力の方向。写真右：左上(S/N 301)の給水後9日目のイネ植物体。(Physiologia Plantarum 165: 464-475, 2019)

写真3には、キュウリの芽生えにできる突起(ペグ)の発達に及ぼす重力の影響を示しています。キュウリ芽生えは、発芽直後に、横になった根と胚軸の境界部分の下側にペグをつくらせて、それで種皮を抑えながら胚軸を伸ばすことによって、種皮から抜け出します。平べったい種子の上下を逆にして発芽させても1個のペグが下側にできることから、これには重力が関係すると考えて、スペースシャトルでの宇宙実験を行いました。結果は写真のとおり、微小重力下では、ペグが根と胚軸の境界部の両側に1個ずつできることがわかりました。この結果から、キュウリの芽生えは境界部の両側にペグをつくる能力を持っていると同時に、地上で下側に1個のペグをつくるのは、重力を感知して上側のペグ形成を抑制しているためであることがわかりました。

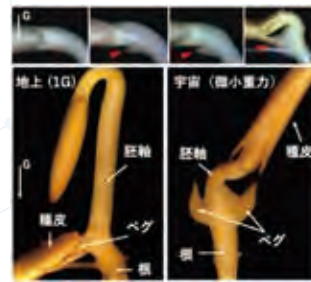
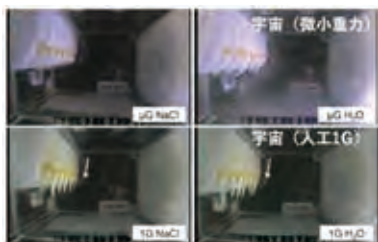


写真3 キュウリ芽生えのペグ形成と重力応答 一重力応答によって上側のペグ形成を抑える一

写真上段：平べったい形のキュウリ種子が傾いて発芽するとき、根と胚軸の境界部分の下側にペグ(赤色の矢尻)と呼ばれる突起をつくる(左から3枚目までの写真では種皮を剥いだ状態)。ペグは発達して種子の下側の種皮を押さえ、胚軸が上に伸びて、芽生えが発芽孔から抜け出すのを助ける(左から4枚目の写真)。写真下段：左は地上で発芽させた芽生え。矢印(G)は重力方向。右は宇宙の微小重力下で発芽させた芽生えで、ペグを両側につくる。(Planta 210: 515-518, 2000; Plant Physiology 158: 239-251, 2012)

スペースシャトルのペグ実験では、もうひとつ、面白い現象が見られました。それは、密閉された容器の中で生育したキュウリ芽生えの根が水をたっぷり含んだ支持体に向かって

伸びていたことです。重力屈性が起こらないような微小重力下で、根は水を求めて支持体側に伸びたのでしょうか。これを検証するために、ISS「きぼう」実験棟で宇宙実験を実施しました。その結果を写真4に示します。密閉容器の中に水分勾配をつくって、宇宙の微小重力区と人工重力区で根の伸びる方向を比較しました。そうしますと、微小重力区ではすべての根が水を含んだ支持体側、つまり高水分側に伸びました。一方、人工重力下では、水分勾配が存在していても、根は人工重力の方向に伸びました。このことから、キュウリの根は水分勾配を感知して高水分側に伸びる、いわゆる水分屈



性の能力を持っていますが、地上では重力屈性が優位に働いて水分屈性が見えにくくなっていることがわかります。

写真4 キュウリの根が水分の多い方向に伸びる能力、水分屈性 一宇宙の微小重力下で証明一

キュウリ種子を、発芽孔を下に向けて支持体にとりつけ、宇宙で支持体に給水することによって発芽させる。そのとき、容器の中の対面側に貼ったろ紙に少量の水か塩水を含ませて、支持体とろ紙の間に水分勾配をつくる。微小重力下では（写真上段）、発芽してきた根が高水分側の支持体に向かって伸びる。一方、人工重力下では（写真下段）、根は重力屈性によって矢印の人工重力の方向に伸びる。（New Phytologist 215: 1476-1489, 2017）

このように、宇宙環境を利用することによって植物の機能を明らかにすることができます。ここに紹介した3つの宇宙実験の結果に基づいて研究をさらに発展させ、それぞれを制御する遺伝子・分子を発見してきました。これまでの日本の宇宙実験では、栽培・環境制御装置の制約から、実験材料は小型の植物体に限定されていました。それでも、得られた知見は、生物学的には勿論のこと、今後の食用作物を含めた比較的大型の植物種の宇宙実験や宇宙環境での食料生産にも有益と考えられます。例えば、根が水分を感知して高水分側に伸びる性質とその制御遺伝子の発見は、宇宙や半乾燥地などで重要になる節水型作物栽培に必要な品種や栽培技術の開発につながる可能性があります。現在、宇宙環境を利用した植物科学は、これまでの生物学的意義を求めたアプローチだけでなく、近未来の宇宙居住に向けて、人類の健全で持続的な宇宙活動を支える学術領域として期待されています。それを「宇宙園芸研究センター」の設立にみることができます。

宇宙園芸研究センター発足の背景

日本を含めて、昨今の人類の宇宙活動はめざましく、とくにアルテミス計画を中心に、月・火星の有人探査、そして長期宇宙居住の実現に向けて様々なプロジェクトが始動しています。そうした状況の中で、人類の長期宇宙滞在には宇宙での食料の生産・供給が必須であることが指摘・クローズアッ

プされるようになりました。日本でも、宇宙航空研究開発機構（JAXA）は、「月面農場」の実現に向けた栽培技術、無人化技術、リサイクル、全体システムについて検討を行い、2019年6月に「月面農場ワーキンググループ検討報告書」を公開し、それに基づいた産学官の共創プロジェクトがスタートしています。2022年には日本の国際宇宙探査シナリオ(案)2021（JAXA）が公開され、そのロードマップに食料生産が掲載され、本年6月13日に閣議決定された「宇宙基本計画」では、月面での持続的な有人活動のために、食料生産といった技術の研究開発を実施する方針が明確にされました。

宇宙における食料生産は、人工光型の植物工場で行われると考えられています。しかし、宇宙という特殊な環境でどのような植物を、どのように効率的に栽培するか、そして、資源を無駄にしない資源循環型の食料生産システムとして開発できるかどうかが大きな課題です。これまでスペースシャトルや国際宇宙ステーション（ISS）などの宇宙船において、いくつもの植物種で、環境を適切に制御すれば宇宙空間でも開花結実することなどがわかっています。しかし、宇宙実験でも生産性や種子稔性が低下するなどが報告され、また、多様な園芸植物を宇宙環境で効率よく生産して食料を供給するためには、解決すべきさまざまな課題があります。例えば、月面では、重力環境が地上や宇宙船内と異なります。1/6Gで機能するシステムが必要なのです。こうした課題解決に組織的に取り組む研究機関は、日本にありませんでした。

そこで千葉大学は、これまでの研究実績と技術基盤を活かし、宇宙園芸学を創成して、人類の宇宙での安全且つ持続的な活動を可能にする物質循環型の食料生産システムを開発するとともに、その成果を地球社会に還元することを目標に、宇宙園芸研究センターを設立して、当該領域を先導する国際研究拠点の形成と人材育成を目指すことになりました。千葉大学が本センターを発足させた主な必然性は、次のように考えられます。まず、千葉大学の園芸学研究院が誇る、施設園芸と宇宙展開も視野に入れた植物工場の先導的な研究実績の蓄積、工学研究院のロボティクス・AI技術に関する世界的評価、そして、全学に展開されている物質循環・機能性植物・健康に関する研究が千葉大学の強みとして高く評価されていたことが挙げられます。それらが部局横断的に連携して組織的にアプローチすることによって、求められる宇宙食料生産システムの基盤構築がはじめて成し遂げられると考えられます。同時に、センターの部門長をはじめとする中核は、JAXAとも深く関わり、宇宙における食料生産の検討や戦略的プロジェクトで主導的な役割を果たしていることも大きな原動力になっています。

以上のような背景と実績から、学長のリーダーシップの下、松岡院長が園芸学研究院の内外をとりまとめ、本センターの発足に至りました。

センターの組織構成と目標

図1のとおり、本センターは3つの研究部門で組織され、各部門はさらにそれぞれ3研究グループから構成されます。宇宙環境に適した宇宙品種を開発するための宇宙園芸育種研究部門（華岡部門長）には宇宙環境応答、宇宙品種開発、育種生産技術の3研究グループ、宇宙環境で環境制御や自動化や遠隔操作の効率化を図る高効率生産技術研究部門（後藤部門長）には植物生産、植物モニタリング、宇宙園芸ロボットの3研究グループ、そして、ゼロエミッション型

物質循環を可能にするゼロエミッション技術研究部門（中野部門長）にはシステムダイナミクス統合、植物微生物インタラクション、資源循環システムの3研究グループをおきます。各部門・グループの具体的な研究内容については、センターのホームページ（<https://www.space-chiba-u.jp>）をご覧ください。

本センターには全学が参画する形になりますが、園芸学研究院からは18名の教員が参加します。うち2名が専任で16名が兼任になります。また、国内外の関連機関・大学との連携を推進して国際研究拠点としての活動展開を目指します。すでにJAXAから1名の客員教授を迎えることになりました。宇宙園芸研究センターは、園芸学研究院附属として既存の研究・技術・運営基盤に支援されますが、全学の関連領域の協力の下、宇宙と食料という視点を加えて、新たな学術領域の創成を目指します。それによって得られる成果は、母体となる園芸学研究院を強化し、今後の持続的社会的形成のために必要な園芸基盤の構築を可能にする革新的イノベーションをもたらすことを期待しています。付加価値の加わる新園芸植物の開発や植物工場の生産性と効率性の飛躍的向上だけでなく、一層のサステナビリティを求めて、ともに園芸学を発展させ、地球の持続的社会的発展に貢献できることを願っています。本センターの活動によって、千葉大学全体にも新たな活力が生まれ、近未来に求められる人材・ロールモデルの輩出につながることを期待しています。

宇宙園芸学の国際研究拠点化と研究成果の社会実装

本センターは、千葉大学がこれまでに築き上げた植物工場研究のネットワークや宇宙関連プロジェクトを活用しながら、学外関連機関・学協会・民間企業と連携し、国内の宇宙園芸研究の組織化・拠点化をすすめることから始めて、それを

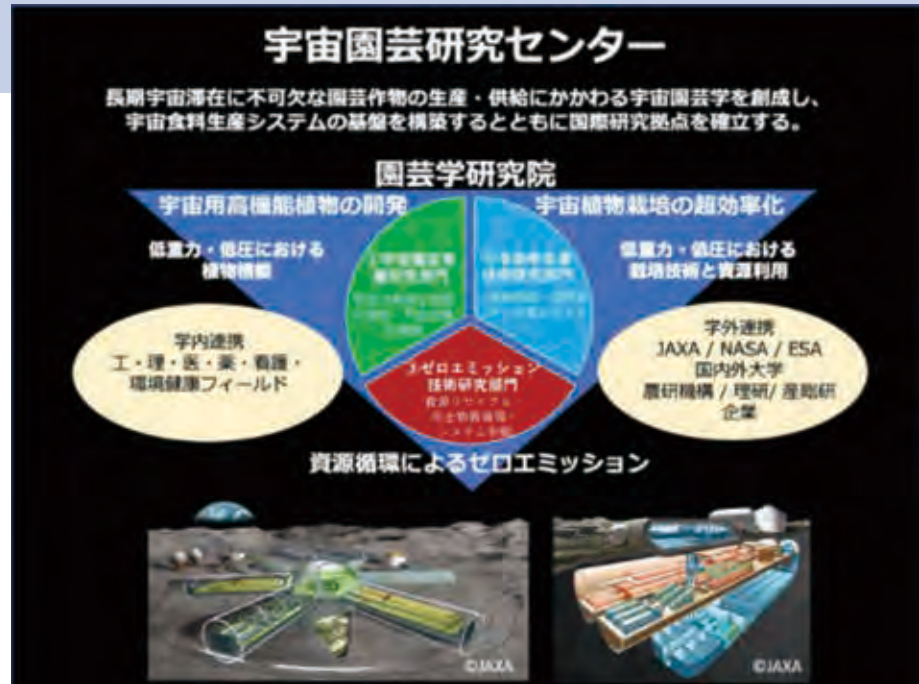


図1 千葉大学大学院園芸学研究院附属 宇宙園芸研究センターの研究部門並びに学内外機関との連携計画

アジア・太平洋地域の連携に拡大していきたいと考えています。同時に、NASAやESAが中心となる既存の拠点とも連携し、国際研究拠点の形成を目指します。

宇宙園芸研究の成果は、人類の長期宇宙滞在・宇宙居住のための食料の生産・供給システムの基盤を構築するだけでなく、さまざまな産業に波及して、地球社会の課題を解決することにも大きく貢献すると期待されます。例えば、植物工場の生産効率の飛躍的向上と普及、気候変動にレジリエントな作物生産、乾燥地農業への展開、食による病気予防と健康維持、バイオマス資源の超有効利用、リサイクル・ゼロエミッション技術の産業への波及が期待されます。これらは、食料生産のみならず、居住空間全体の元素循環の制御にも及び、地球の持続的社会的発展に貢献します。そのための社会実装と事業化を推進するしくみをセンターの中につくりたいと考えています。宇宙と地球の両方のQOL（生活の質）を向上させる宇宙園芸研究を展開します。

月を周回する有人宇宙ステーション、月軌道プラットフォームゲートウェイの建設は2024年以降に開始されます。2028年頃には人類が持続的な月面活動を行い、2030年代には人類を火星に着陸させると想定されています。そうしますと、長期有人宇宙探査に健全な食生活を提供するために、また、宇宙に居住して食料を地産地消するために、宇宙食料生産システムの研究開発も、今後5-10年の工程で加速させることが重要になります。地球社会の気候変動下での農業やサステナビリティの向上も喫緊の課題です。私たちは、これらの課題解決に貢献することを目標に、本センターの目的・使命を果たすことに全力を尽くす所存です。皆様の一層のご理解・ご協力・ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

コロナ禍を乗り越えて

戸定会会長 加藤 一郎

皆様におかれましても新型コロナウイルス感染症の災禍の中でご苦労されていることと察しております。1日も早いこの感染症の終息と、皆様のご健勝を心よりご祈念申し上げます。

令和5年度の理事会総会は4年ぶりに6月10日に対面で開催することができました。

参加者は総勢71名に及びました。皆様方も久しぶりに古き良き友人と歓談することができたことと思います。支部総会も今年から順次開催され、コロナ以前の状況に戻り始めました。

同窓会と大学との諸課題の共有化を図るため開催しているパートナーシップ会議も今年7月には73回を重ねることになりました。この取り組みは各学部の同窓会が参加する千葉大学校友会の中で園芸学部唯一の取り組みであり、大学からも高い評価を得ております。

戸定会本部の執行体制の経歴をよく聞かれますのでここでご紹介いたします。賀来宏和副会長は昭和52年造園学科卒業、昭和54年に大学院修了後、建設省（現在の国土交通省）に入省、その後退職して企画会社を設立し、現在は2027年（令和9年）に横浜市にて開催が予定されている国主催の国際園芸博覧会の準備に携わっております。今年3月には、『一茶繚乱〜俳人小林一茶と江戸の園芸文化』と題する書籍を上梓されました。

齋藤京子副会長は昭和51年園芸学科卒業後、農水省に入省、退職後様々な機関の委員に就任し、戸定会では女性理事の複数登用と女子学生への就職支援・就業継続支援を推進しております。学内副会長の応用生命化学科江頭祐嘉合教授との協力体制を構築しております。

古谷教授（緑地環境学科）のご尽力で戸定会のホームページを刷新しております。各支部活動の掲載をおこなっておりますので、ご一読、併せてご投稿をお願いいたします。

昨年度に戸定会会員名簿の作成をいたしました。県別の会員の名簿も新規に記載いたしました。各支部管内に居られる卒業生に支部活動を紹介するうえで、参考になりますので是非ご活用ほどお願い申し上げます。戸定会事務局に多少在庫がございますので、ご購入ご希望の場合はお問い合わせください。

今年度中に支部総会を実施する支部に対して「支部総会開催特別支援金」制度も用意いたしました。是非ご利用ください。

戸定会の運営資金は皆様方からの戸定会への寄付金で運営されております。ぜひ皆様方からの寄付金を期待しております。寄付者には沼田農場の林檎など御礼品をお贈りしておりますのでよろしく願います。

今年の戸定祭は11月4日、5日で開催予定です。ホームカミングデーとして戸定会も企画案を検討中です。園芸学部で再会しましょう。



新型コロナウイルス感染症発生以前に戻った園芸学部

園芸学研究院長 松岡 延浩

卒業生の皆さまにおかれましても、新型コロナウイルス感染症発生以前の状態に戻りつつある今日この頃と思います。2020年4月以降、松戸キャンパスへの入構規制を行い、卒業生の皆さまにもご不便をおかけしたこと、深くお詫びいたします。昨年度後半から、大学全体の規制を鑑みながら、松戸キャンパスでも戸定会関連の諸会議、戸定祭、ホームカミングデーなどを新型コロナウイルス感染症発生以前と同様に行うことができるようになりました。6月の戸定会総会でも懐かしい卒業生の皆さまと久しぶりにお話しができ、新型コロナウイルス感染症発生以前に戻ったことを改めて実感いたしました。

園芸学部・園芸学研究科の教育の現状をかいまみしてお話しいたします。在校生に対する講義も、ほぼ対面の講義に戻りました。その一方で、瓢箪から駒とでもいまいしょうか、オンライン講義の長所（復習がしやすい、海外留学中でも受講できる、大学院生は研究と重複してしまっても時間の調整ができるなど）も認識され、今後の講義のあり方が再考されています。

今年度は、全員が海外留学を経験できそうです。2020年度以降入学の学部生、大学院生の全員留学をうたったものの、新型コロナウイルス感染症に出鼻をくじかれてしまいました。その間、学生には海外の協定校の講義をオンラインで受講してもらったり、協定校とのオンラインセミナーに参加してもらうなどの代替措置がとられました。これは、海外留学に胸を膨らませていた学生には大変申し訳ないことをしたと思っています。

戸定会の皆さまの経済的支援を受けて完成したアカデミック・リンク松戸もようやく本来の使い方ができるようになりました。その特徴の一つである、ディスカッションができる空間が、新型コロナウイルス感染症により制約を受けておりましたが、ようやく本来の機能を発揮しております。

このように、学生達もやっと勉学に励み、自由に友人とディスカッションができる状況が戻ってきました。卒業生の皆さまも、是非松戸にいらして、和気藹々と勉学にはげみ、語らっている後輩達にお声をかけてやって下さい。

最後に、園芸学研究院の動向を簡単に書かせていただきます。本年1月1日付けで、園芸学研究院附属宇宙園芸研究センターが発足しました。卒業生の皆さまから、園芸技術の開発・普及に関わる教育・研究がおぼつかないのに、何が宇宙だ！そんなことをやっている暇があるのか？と、お叱りを受けるのは承知です。センターの詳細は、高橋秀幸センター長の別記事を読んでいただきたいと思います。私は、これからの園芸学研究院は、宇宙空間でも利用できるレベルまで研ぎ澄まされた技術を開発し、それらを地上の園芸産業に技術移転する位の発想で、教育・研究を進めていって欲しいと、同センターを立ち上げました。また、様々な場で、皆さまと侃々諤々と議論させていただきながら、センターを運営していきたいと思っています。

今後とも、母校へのご協力、忌憚なきご意見を賜れば幸いです。



退職のご挨拶

園芸学科 教授 三 吉 一 光

本年3月に定年退職を迎えました。本研究科には2012年4月1日に花卉園芸学研究室の教授として着任して以来、12年間勤務させていただきました。1982年3月に当時の育種学研究室で修士号を取得してから40年ぶりの母校での勤務となりました。赴任時の松戸キャンパスの建物はほぼ往時のままでしたが、女子学生の比率がほぼ倍増し、大学院の定員は大きく増加し、さらにかつては主に園芸学科・大学院園芸学専攻に少数が在籍していた留学生も、松戸キャンパス全体で大幅に増大しており隔世の感を持ちました。

一般に園芸産物の需要弾力性は大きく、『我慢しようとするれば我慢できてしまう性質』を持っており、需要を喚起するためにも、変異の拡大とその利用が積極的に行われてきました。このため、園芸学は見方によっては、『多様性の科学』とも言えます。中でも、既存の変異を、急速に発展した分子生物学的な手法を用いて解析する研究は、十年來の喫緊の課題となっており、また、新しい観点によって変異を拡大した新品種の作出は、大学が園芸産業に先導的かつ実質的に貢献できる、数少ないことの一つと言えます。しかし、研究体制としては、実質的に‘ワンオペ’の状態が続き、なかなか進展が得られませんでした。

転機となったのは2017年3月1日付けの出口亜由美特任助教（現助教）の着任で、実質的な2人体制になり、分子生物学的な手法も取り入れた研究の展開が進みました。また、2018年度から生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」の研究代表者として、『うどんこ病抵抗性と密植栽培適性を兼備し施設栽培に適したダリア切り花用品種の育成』事業にも携わることができ、難防除性病害であるうどんこ病に強かつ葉が小さく密植が可能となる、施設栽培用のダリア切り花用品種2点、‘千葉大PMRホワイト’と‘千葉大PMRマゼンタ’を本年3月29日に品種登録出願しました。これらの育種は2つの形質に着目し、さらにダリアのような栄養繁殖性の園芸植物では実施例の少ない循環選抜（世代を重ねて繰り返し改良する）を行った、先駆的な育種に位置付けられます。本育種事業によって、これまで十分量が安定的に供給出来なかった、ダリア切り花の生産構造の改善が期待されています。

最後に、本学および本研究科が国際的に益々発展することを祈念するとともに、これまでのご支援に感謝申し上げます。



退職のご挨拶

園芸学科 教授 中 村 郁 郎

本年3月に定年退職を迎えました中村郁郎です。千葉大学園芸学部へは、1998年4月に自然科学研究科の助教授として着任して以来25年間勤務させていただきました。

私は、岩手大学農学部出身で、名古屋大学農学部で博士学位を取得後、アメリカのセントルイス市にあるワシントン大学のRoger Beachy博士の研究室で植物の遺伝子組換えの研究に従事しました。その後、(株)植物工学研究所の特別研究員となり、バイナリーベクターの構築を担当しました。当時は、島本功（故人）、井澤毅（東大）、経塚淳子（東北大）教授など錚々たるメンバーがおりました。その後、三島市にある国立遺伝学研究所の実験圃場の助手として採用されました。私には、野生イネの生態遺伝を研究されていた森島啓子教授と大腸菌のRNAポリメラーゼを研究されていた石浜明教授の2人のボスがあり、2つの研究室のゼミに週7回参加しました。5年後、郷里の岩手県に（財）岩手生物工学研究センターが設立され、イネ優良品種母本作出担当の主席研究員として赴任しました。

平成10年、三位正洋教授が主宰されていた植物細胞工学研究室に参加し、植物の種分化と植物の遺伝子組換えに関する研究に取り組みました。当時は、三位教授の指導生が40名程度おり、国際色の溢れる研究室でした。植物の種分化に関する研究では、コムギ、バナナ、パチュニア、ブラシカ、メロンなど様々な植物を扱いました。また、遺伝子組換えに関する研究では、病虫害抵抗性を中心に色んな優良形質の付与に関する研究を行いました。種分化および遺伝子組換え、それぞれ30数名の学生さんにお世話になりました、感謝致します。この間、遺伝研時代の同僚佐藤洋一郎先生が組織した東南アジア地域の野生イネの調査に25年間参加しました。新疆ウイグル自治区の小河墓遺跡、ラオスの陸稲、ミャンマーの浮き稲などを視察することができたことは良い経験でした。思い起こすのは、本学の育種学研究室の一期生で、岩手大学非常勤講師の故橋本昌幸先生が、学部生の私に2つの宿題「チョコレートコスモスの分類、ソメイヨシノの起源」を出されました。その後の分子遺伝学の進歩により、一応の答えを出すことができたことは良い思い出です。

4月よりは、特任研究員としてまだ大学に残っております。子供4人が東京ですので、元気な内は、松戸におりますので、よろしく願い致します。最後に、園芸学部および戸定会の益々の発展を祈念すると共に、長い間のご支援誠にありがとうございました。



退職のご挨拶

食料資源経済学科 教授 小林 弘 明

東日本大震災の年、2011年4月に町田市の和光大学・経済経営学部から本学に教授として着任し、本年3月までの12年間奉職させていただきました。50歳過ぎの異動で、長距離通勤がこたえましたが、本学には職場として、働く場として申し分のない環境を提供していただきました。現在は非常勤講師を少しだけ受け持つなど、セミリタイア状態です。



本学では事務職員の皆さんの精度の高い仕事ぶりと同僚たちの優秀さに感心しました。仲が良くなった助教のAさんやかつての職場の若い研究者と科研などでの共同研究もできました。そして何より、勉強ができるだけではない、人間としても完成度の高い素晴らしい若者・学生たちと身近に接することができました。特に卒業研究に取り組む場を共有できたこと、4名の修士と3名の博士の指導教員になれたことは、私にとって最も貴重で何ものにも代えがたい経験です。

しかし思い返せば私の着任時、私を含めて11名いたスタッフは、本年4月1日までに4名が新規に採用される一方、9名が退職して、なんと総勢6名となってしまいました。退職者のうち5名は定年、4名は転出です（本年度も1名が定年退職予定）。学生定員は若干名減りましたが、学科を名乗る教員人数の要件ギリギリだとか。教育の質が低下しないか…、心配です。

転出者のAさん（現在は某私立大学講師。給料は驚くほど増えたそうです）、Bさん（現在は某公立大学講師）、Cさん（現在は某国立大学教授）は転出時に助教でした。Dさん（現在は某国立大学教授）は長い助手・助教時代を経たのち、転出時には准教授でした。助教のBさんはテニユアトラック期間での転出だったので、おめでたい話ですが、あとの3名は、ポストの割に高齢なうえ、近い将来での昇格に展望が持ちづらいことも背景にあったのかもしれませんが。AさんとCさんも助手・助教のまま10年以上本学にいました。Aさんは、5年間のテニユアトラック期間を無事にクリアしたにもかかわらず、その後も5年以上助教のままでした。私見では、Aさん、Cさん、Dさんはいずれも昇格に値する十分な業績を有し、学科の顔ともなる有望な研究者・教員です。

スタッフが抜けてもすぐには新規公募できず、必ずしも期待するほどの応募があるとは限りません。足元も見る必要があります。本学の発展を願いつつ、Aさんたちを留められなかったことを残念に思います。

退職のご挨拶

緑地環境学科 教授 池 邊 このみ

私が着任したのは、忘れもしない東日本大震災の10日前、2011年3月であった。退官までの12年間、戸定会を始め、諸先輩、同僚、事務の方々には大変お世話になりました。深く感謝いたします。特に、木下先生と事務の方々には、頻繁な復興活動に身体がもたなくなり、手術まですることになり、本当に私が無事退官できたのは、皆様のおかげと本当に深く感謝しております。



私は、大学2年の時に大学教員をしていた父が癌になり他界、生命保険もないまま、世間にほうりだされた中、授業料免除や入学料免除をしていただきましたがそれだけでは足りず、ランドスケープと都市計画の会社での協力社員をする傍ら、フリーで企業から直接の仕事で沢山いただき、内容もアルバイトの域を超え、21歳から30歳でシンクタンクに入るまでは、本当に大変苦労な日々で結婚前後でも徹夜の連続でした。結婚後半年で妊娠がわかった時、当時は育休もありませんでしたので、このままでは子育てと仕事が両立できないと、日経新聞の半面広告に掲載されたシンクタンクに応募、激戦を乗り越えサラリーマンになり、自治省出身の社長の温情で最初は週3日勤務、そして、娘が1歳になってから通常勤務とさせていただきます。（株）三井住友トラスト研究所、（株）ニッセイ基礎研究所での約25年間超のシンクタンク生活は、国土交通省等官庁の仕事に携わり、メールのない時代でもあり、大変な激務でしたが徹夜と育児と妻業を何とか両立した。大学への転身の前に実は、（独）UR再生機構の都市デザインチームリーダーへの招聘がありました。思えば、この時の最後に手掛けた団地再生の仕事から、私は磁石のようにランドスケープの世界と母校に吸い寄せられたと思っています。

着任時は、学生との対話の場所をつくろうと、教授室の前にあったさびしい書庫を破棄、色とりどりの椅子と大きな楕円の机、ティファールなどを完備して、ホスピタリティの高い居心地のよい空間をつくりました。それが運気を呼んだのか、指導学生数は、非常に多く、リモートの時のゼミには50人を超えていました。ちなみに指導学生の累計は、卒論生33名博士前期課程61名博士後期11名論文博士2名研究生28名の計135名です。学生達は、優秀で明るく積極的、コンペや学会の支部大会、日中韓のポスター発表などに多く積極的に参加してくれました。

最後に、令和5年に施行された「盛土規制法」については、関係省庁が多いことから、内閣府において審議されたものであるが、私の博士論文の内容に非常に関連が深いもので、退官の年に審議に参加して、施行されたことは大変嬉しいことであった。

退職のご挨拶

緑地環境学科 教授 本 條 毅

本年3月に定年退職いたしました。千葉大学園芸学部には1997年4月に自然科学研究科助教授に赴任して以来、長年にわたりお世話になりました。千葉大に赴任する前には、東京大学農学部で7年間助手を、東海大学開発工学部で6年間講師、助教授を務めましたので、千葉大で過ごした時間が私のキャリアの中で最も長くなりました。内容的にも充実したものでした。とくに、松戸の緑の多い美しいキャンパスで、過ごせたことは大変幸運でした。また、多くの学生たちと一緒に研究できたこと、さまざまな専門の方々との出会い交流できたことは貴重な思い出です。



大学院で、「緑地を活用してどの程度ヒートアイランドが緩和できるか」を研究テーマとして学位を取得して以来、同様な研究を継続して行う一方、さまざまなテーマの研究を行ってきました。最近では、「緑地の熱的効果」が都市計画やランドスケープデザインにどのように影響を与えるかについてや、ヒートアイランド自体の構造やメカニズムについて研究をしてきましたが、十分に成果を収める前に退職となりましたので、今後も趣味として取り組んでいければと思います。

退職後は、自宅、兵庫県の実家、できれば海外など、いくつかの場所での生活となる予定です。しかし、いざ始めようとすると、自宅の庭の多肉植物を増やしすぎたのに、世話をすることができないので頭を痛めています。もし、引き取ってくださる方がいらっしゃいましたら、お気軽にご連絡をくださいますようお願い申し上げます。

最後に、常に温かいサポートと励ましをいただきました同僚の皆様、研究を一緒に行ってくれた学生、他大学の研究者の皆様から心から感謝いたします。



退職のご挨拶

応用生命化学科 教授 西 田 芳 弘

令和5年(2023年)3月をもって千葉大学を退職致しました。16年前(2006年10月)、名古屋大学工学研究科から転任してから、あっという間に月日が流れました。歴史ある千葉大学園芸学部で、なんとか16年間を健康なうちに終えることができたことに、多くの満足感を感じています。



在職中は、千葉大学、とりわけ園芸学部の教職員や事務職員、戸定会職員の方々に心暖かく接していただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

赴任直後に新たに発足した応用生命化学科の専任教授として、学科の定着と発展に少しでも貢献できればと思い日々を送っておりました。元々学生の皆さんと接することが好きで、指導教官というよりは、逆に学生の皆さんから多くのことを学び、また元気(エネルギー)をもらっていました。学生の皆さんは、入学当初には想像ができないくらい大きく成長して、自らが選んだ道(社会)に巣立っていきます。卒業式や修了式で成長した皆さん一人一人を見て確認することが、毎年の楽しみでした。学生時代の自分を思い出す時間でもありました。学生時代に在籍していた学科(東北大学農学部食糧化学科)は応用生命化学科と同じように一学年30数名の小さな学科でした。そこで学んだことが人生の礎になっていることは間違いありません。大学4年次に研究室配属となり、目黒熙先生から糖の「立体化学」を、大類洋先生から「反応有機化学」を学びました。

東北大学で助手(助教)として10年、名古屋大学で助教授として10年、計36年間にわたる教官生活は、常に家族(妻と長女)とともにありました。16年前、自家用車に妻を乗せて名古屋を出発、松戸キャンパスにある(圃場の裏手)の職員宿舎に朝5時に着いた時のことを思い出します。早朝の薄暗い中、古びた宿舎を見たときは不安を感じました。妻と二人だけの生活(長女は京都で大学生)なので、何とかなるだろうと、意識をとり戻して新生活が始まりました。妻は地方育ち(岩手県奥州市)で、植物をこよなく愛する人ですので、私以上に松戸キャンパスを満喫していたようでした。妻は「茂子」で長女は「菜々子」で、「くさかんむり」が我が家の共通点です。すでに、菜々子は二人の子供の母親です。長男は「麟(りん)、3歳」で、私たちにとって、初孫になります。今年6月に長女が誕生、「花(はな)」と命名されました。将来、松戸キャンパスで学んでいる「麟」や「花」が居るかもしれません。我が家の世代交代は、着々と進んでいます。

最後になりましたが、千葉大学園芸学部、ならびに戸定会の今後ますますのご発展を祈念いたします。

新任のご挨拶

園芸学科 教授 中野明正

本年4月1日付で、園芸学研究院先端園芸工学講座に配属となりました。着任前はもっぱら農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）において一貫して、施設野菜の生産や品質向上技術に関する研究に取り組んできました。ご存知の通り農研機構は農林水産省の所管する国の研究機関で、そこで私は研究のみならず総合企画調整部で企画調整室長などの研究マネジメントも経験してきました（2010～2011年）。また、このように農研機構内で研究とマネジメントを行き来する間も、農林水産省（霞が関）に異動して、農林水産技術会議事務局では研究開発課課長補佐や（2004～2005年）、生産局園芸作物課では研究調整官（2017～2020年）を勤め「スマート農業」の立ち上げに関わったことは大きな経験となりました。このように、野菜を中心とした園芸作物研究の推進とその成果の実装に努めてきました。2020年からは千葉大学学術研究・イノベーション推進機構の立ち上げのメンバーに加えていただきURAとして多様な仕事を経験させていただき現在に至っております。

千葉大学園芸学研究院とは以前から施設園芸で共同研究等の実績があり、古在豊樹先生、丸尾達先生、後藤英司先生からは、大所高所からご指導いただきました。特に、農林水産省が平成21年から実施した「植物工場実証展開事業」では東の拠点として千葉大学と農研機構が連携して推進してきたことは、その後の次世代施設園芸拠点整備（全国10か所）へと展開し、近年の施設園芸におけるエポックメイキングとなったことと評価されます。このように浅からぬご縁のある千葉大学園芸学研究院の一員となれたことで、現在岐路に立つ日本の農業をけん引すべく、園芸分野の新しい研究を切り拓いていきたいと考えております。

最後に、私のモットーは「園芸イノベーションで世界を豊かに」です。研究の方向性は3つあります。①まずは園芸イノベーションの推進です。園芸作物の可能性を広げる民間との共同研究により新結合を実践します。そして、②園芸作物の知の基盤構築を進めます。作物の「根」に関する研究を特色とし「園芸根学」を創成したいと考えています。そして最後に③実学として園芸学を追求したいと思います。研究開発した成果や生産技術を世界的視野で生産現場へ実装することを常に考えていきます。フィールドは宇宙にも及び、地球にも応用可能な持続的農業の確立を目指します。様々な場面で、皆様との連携に努めていく所存です。ご指導方よろしくお願いたします。



新任のご挨拶

園芸学科 特任教授 高橋秀幸

私は、2023年1月1日に発足しました園芸学研究院附属宇宙園芸研究センターに、同日付けで着任しました。センター長の重責には身が引き締まる思いですが、目標に近づくことができるように全力を尽くして参りますので、皆様のご指導・ご協力・ご支援を賜りますよう、よろしくお願いたします。

さて、私は山形大学農学部園芸学科の学部4年生のときに、青葉高教授の野菜園芸研究室に入門しようとしたところ、青葉先生が千葉大学園芸学部へ転出されることを告げられました。その青葉先生のすすめで、当時、助手をされていた高樹英明先生を指導教員として、「ニンニクの球根形成と休眠」を卒論研究にしました。鶴岡の川端にあった料亭での青葉先生の送別会を忘れることはできません。その青葉先生が過ごした松戸キャンパスに、今、自分がいることに何か不思議な縁を感じています。

私は大学院修士課程では研究課題を変えて、齋藤隆教授のご指導の下、ウリ類の花の性分化における植物ホルモン、日長、葉の役割を研究しました。東北大学の博士後期課程に編入学後も、同研究を継続することを許していただきました。その東北大学でご指導いただいた菅洋先生は、接触形態形成とエチレン・ジベレリンの関係を研究のひとつにされていました。私は、ウリ類の花の雌性化を誘導するエチレンの作用を研究していたこともあり、そして菅先生の影響もあって、キュウリの幼植物に接触刺激を処理する実験を行うことになりました。すると、接触刺激がエチレンの生合成を誘導して、見事に花の雌性化を促進することがわかりました。これを処女論文として発表したところ、接触形態形成研究の第一人者であった米国のMordecai J. Jaffe教授からお誘いをいただき、ポストドクとして渡米することになりました。そのJaffe先生の研究が米国航空宇宙局（NASA）の研究助成を受けていたので、私は宇宙生物学にかかわるようになり、NASAの研究者とも共同研究をするようになりました。

渡米前まで、春秋の園芸学会で研究発表をしていましたが、ポストドク以降は、植物生理学会や植物学会での発表が多くなりました。一方で、閉鎖生態系や植物工場、そして宇宙生物学や宇宙機関とのかわりもできて、多くの方に巡り会い、ご支援をいただき、今日に至っています。園芸学から一度は離れたと思っていた自分が、今、ある意味で園芸学に戻っています。宇宙園芸研究が園芸学の一領域として認知されるように努力することが、私の恩師への恩返しになると考えています。この機会を与えてくださいました千葉大学に深謝します。



新任のご挨拶

国際高等研究基幹（大学院園芸学研究院 兼務）
テニュアトラック准教授 南川 舞

令和5年4月1日に国際高等研究基幹テニュアトラック准教授に着任しました南川舞と申します。大学院園芸学研究院を兼務しており、栽培・育種学領域の遺伝育種学研究室で活動しています。国際高等研究基幹とは、学際的先端研究及び価値を創造するイノベーション研究の拠点として令和4年4月に千葉大学に設置されました組織です。本部は西千葉キャンパスにございますが、実際の私の研究活動の拠点は松戸キャンパスとなります。私は千葉大学園芸学部出身です。園芸学部に入學してから博士号を取得し、その後のポスドクまでの長い時間を松戸キャンパスで過ごしました。懐かしい母校に着任することができ、とても幸せな思いに包まれております。

専門は主に果樹を対象とした遺伝育種学です。学生時代は、バラ科果樹であるリンゴやナシを対象に自家不和合性機構の解明を目指して研究を行って参りました。自家不和合性を有するリンゴやナシでは同じ品種同士の交配では実らないため、ミツバチや人工授粉などにより、他の品種の花粉を受粉させる必要があります。自家不和合性機構を人為的に制御できれば、ミツバチや人工授粉の要らない果実生産が可能になります。その後、ポスドク期間は東京大学大学院農学生命科学研究科に研究の拠点を移し、主にカンキツ、リンゴ、ナシを対象として、ゲノム情報を活用した育種法に関する研究を行ってきました。芽生えの段階で将来できる果実の特性を高精度に予測して選抜（ゲノミックセレクション）できることを明らかにしました。果樹の品種改良は長い時間がかかり非常に多くの労力を必要としますが、ゲノミックセレクションを利用すると効率的に新品種を育成できる可能性があります。

私はこれまで、統計学、遺伝学、育種学等、様々な専門分野の研究者と協働して学際的に研究を進めることで、自分一人では成し得ない多くの科学的真理に辿り着くことができました。今後も「人と人とのつながり」を大切にしながら共同研究を発展させていきたいと考えています。今年度からは教員として責任を持って人に学問を伝える立場となりました。果樹の遺伝システムを学際的に理解する魅力を、教育という場面でも伝えていきたいと思っています。

愛する母校発展の一助となれるよう、これからも研究・教育に努力して参る所存です。戸定会の皆さまのご指導を賜りますよう、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



新任のご挨拶

園芸学科 特任助教 近藤 悠

2023年4月1日に着任いたしました園芸学研究院植物生命科学講座特任助教の近藤悠と申します。2013年4月1日に千葉大学園芸学部に入學して、修士課程、博士課程、ポスドク期間を経て、ちょうど10年後に特任助教として着任することとなりました。学生時代は、2022年度をもって定年退職された三吉先生の下で、花卉園芸植物を対象に研究を行って参りました。これまでの生活と比べて、変わったこともあれば、変わらないこともあります。変化をキーワードにしながら自己紹介とご挨拶ができればと思います。

最大の変化といいますと、所属の違いで、これまでは花卉園芸学でしたが、これからは宇宙園芸研究センターとなります。宇宙園芸センターは2023年1月より千葉大学に設置され、人類の宇宙居住を目指した植物栽培による食料生産システムの研究開発を行う研究グループです。宇宙で植物栽培を実現するためには、栽培システムの構築や資源の循環など様々な課題がありますが、私は宇宙の特殊環境に適した品種の開発、つまりは、植物のポテンシャルを引き出し改良することで課題の解決を目指します。しかし、宇宙で植物の生育にどのような変化が起きるかを明らかにしなければ、宇宙での栽培に適した植物の特性は分かりません。これからの私の研究では、まずは、宇宙での植物の応答を明らかにする植物生理の研究を行っていくこととなります。そして、実はこの植物の生理を明らかにすることが変わらない点になります。花卉園芸学研究室ではラン科植物を対象に植物の生殖生理などの研究を行って参りました。これからは対象とする植物こそ花から野菜へと変わりますが、植物の生命現象の解明が私の研究の根底となっています。

そのほか、居室が2階から4階になってフランス式庭園がよく見えるようになったことや、これまでは花を花卉園芸学研究室前のTake Freeコーナーに提供していましたが、逆に花をもらうようになったことなど、些細な変化もあります。

宇宙園芸センターの設立という黎明期に特任助教として参画できることを、大変貴重に思っております。まだまだ手探りな状態ですが、一歩ずつ研究を進めていき宇宙園芸の発展に尽力していく所存でございます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



園芸学科の近況

園芸学科長 教授 後藤 英司

園芸学科の近況をお知らせします。園芸学科と大学院の園芸科学コース（園芸学科、応用生命化学科、食料資源経済学科）では、令和5年3月に学部65名の卒業生、博士前期課程58名、博士後期課程4名の修了生を送り出しました。さらに令和5年4月に学部67名、博士前期課程66名、博士後期課程2名の新入生を迎えました。

卒業生の進路は、学部の場合、進学56%、就職（無期限雇用）42%となっています。就職先は公務員が多く、次いで農・林・漁業関係、食品関係、IT・情報通信関係、流通・卸・小売業、建設・不動産などとなっています。

博士前期課程の場合、進学6%、就職（無期限雇用）87%となっています。就職先は公務員と食品関係が多く、次いで研究機関、公益団体、農業・園芸関係、医薬品・製薬・医療機器関係などとなっています。

人事では、三吉一光教授と中村郁郎教授が、令和5年3月末で定年退職されました。一方、令和5年4月には、栽培・育種学領域に特任助教として近藤悠先生が着任されました。宇宙園芸研究センターへの所属となります。ご活躍を期待します。

コロナ禍が収まりつつある中、令和4年度は、園芸学科は、講義の6割以上は対面型に戻り、残る講義はオンデマンド型と対面型を組み合わせるハイブリッド型で行いました。令和3年度は7割以上がハイブリッド型でしたので、かなりコロナ禍以前に戻りました。今年度に入り、学生の雰囲気は従来の学生のそれに近づきつつあります。

園芸学科の教育では実習、演習、実験、現地見学、インターシップを重視しています。今年度はコロナ禍の制限を受けずに従来の教育に戻ることを期待しています。

令和4年度にホームページ「松戸キャンパスVRオープンキャンパスサイト」が開発されました。<https://www.h.chiba-u.jp/>「環境」マップから研究圃場を選び、ストリートビューにてマウスを動かすと、ドローンで撮影した圃場の様子などを見ることができます。ぜひお楽しみください。



応用生命化学科の近況

応用生命化学科長 教授 江頭 祐嘉合

戸定会会員の皆様には、日頃より学科の活動にご協力いただきまして、篤くお礼申し上げます。2020年に拡大した新型コロナウイルス感染症も5月8日から5類感染症に移行され、それに伴い授業もオンラインから対面形式が中心となりました。また、4年ぶりに応用生命化学セミナーの合宿も八王子で開催され、卒業生の吉田浩氏（日清紡ホールディングス（株））と原田雄太氏（Meiji Seikaファルマ（株））による学生生活の送り方、社会人生活などに関する講演がございました。終了後も学生達から沢山の質問があり大変好評でした。

国際・研究関係では、留学も再開され何人かの学生は千葉大学の海外留学プログラムを活用し、タイ、ベトナム、オーストラリア、ロンドンなどへ2週間程度渡航し、授業・実習を通じて現地の大学生と交流を深めました。東京で開催された国際学会（国際栄養学会議）では多くの大学院生が発表し、高尾郁歩さん（指導教員：江頭）が「食物繊維と加熱乳酸菌同時摂取のコレステロール低下作用と機序」に関する研究で若手研究者エクセレントアブストラクト賞を受賞しました。浅野風斗さん（指導教員：児玉教授）は生物工学若手研究者の集いオンラインセミナーで「カブトムシ幼虫の成長促進をもたらす腸内細菌の探索」に関する研究で最優秀発表賞を受賞しました。島田准教授は「植物の油滴が発揮する多様な生理機能の解明」で日本植物生理学会奨励賞を受賞しました。

進路に関しては当学科・学部生の大学院への進学率は72%と依然高い傾向にあります。学部生の就職に関する詳細は学科別・卒業生の進路の頁に記載されていますのでご覧ください。一方、応用生命化学領域の大学院生の進路は、ハウス食品など食品関連会社（46.4%）が多く、次いで昭和電工等の化学工業関連会社（25%）となり、これらで全体の7割以上を占めています。次に製造・卸売・小売業（10.7%）、学術・開発研究機関（農研機構等）（7.1%）、IT関連（3.6%）、地方公務員（東京都庁）（3.6%）と続きます。また、博士後期課程への進学は3.6%でした。例年どおり修士課程修了後は食品関連会社の研究・開発職など技術系への就業割合が高くなっています。

人事に関しては、生物有機化学研究室の西田芳弘教授が今年の3月末に定年退職されました。西田教授は園芸学部の安全衛生委員会管理者として学部の運営にも貢献されました。



以上、簡単な近況報告ではございますが、今後とも学科活動へのご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



八王子での
応用生命化学セミナー
合宿の様子（上・下）

緑地環境学科の近況

緑地環境学科長 教授 木下 剛

戸定会の会員の皆様方には、日頃より当学科の活動に対し多大なご支援をいただき、誠にありがとうございます。

さて、この1年の状況を振り返りますと、2022年度から復活した対面による教育・研究が軌道に乗り、コロナ禍前の活気ある大学の雰囲気が戻ってきたように思います。しかし、コロナ禍は収束したわけではなく、この原稿を執筆している2023年7月現在、再び感染者も出ており、出席・出勤停止を余儀なくされる学生・教員もおります。従来どおり、注意を払いながらの教育・研究を進める必要があると考えております。

卒業生の就職状況については、3プログラム（環境造園学、緑地科学、環境健康学）とも大学院進学が最も多く、それぞれ卒業生の50%、41%、30%が進学しています。次いで、地方公務員や国家公務員、専門・技術サービス業への就職が多くなっています。行政や実業界から、人手不足の声が聞かれるようになってきていること、就職後それほど時をおかず転職する卒業生が少なからずいることなどが近年の傾向としてあります。

その他の学科全体の動きとして、2022年度末をもって池邊のみ教授、唐常源教授、本條毅教授が定年退職されました。また、2023年4月より池井晴美特任助教が赴任されました。さらに、JABEE緑地環境学プログラムが6年間（2021年度～2026年度）の継続認定を受けました。これにより、本学科を卒業した卒業生はこれまでと同様、日本技術士会に申請するだけで技術士補の資格が得られることとなります（技術士の第一次試験が免除されます）。

学生や教員の社会活動としては、「2023年度 日本造園学会全国大会学生公開コンペ」において博士後期課程の孫夫昊さん・崔景舒さん、博士前期課程の張思漢さん・炭村匠海さん、園芸学部4年の渡邊優さんの作品が応募総数50作品以上の中で優秀賞を受賞したこと（2023年6月）が特筆されます。また、竹内智子准教授が主査を務めるワーキンググループがまとめた「日本インフラの体力診断（公園緑地）」（土木学会）が公表されています（2023年6月）。

以上、簡単な近況報告でしたが、皆様方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻の程どうぞよろしくお願いを申し上げます。



生き生きとした実習の風景が戻ってきました（緑地環境学科2年生）

食料資源経済学科の近況

食料資源経済学科長 教授 栗原伸一

ようやく新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、本学科でも多くの科目が以前の対面授業に戻っております。マスクを外した（もちろん任意です）学生達の笑顔を見られるのは教員にとっても嬉しいものです。

まず、入学状況ですが、今年度も前期6.5倍、後期8.5倍という極めて高い志願倍率（前期は全学でも最高倍率です）のなか29名が入学しました。ただし、来年度からは後期の小論文が学部共通の理科に変更されるため、どのような影響が出るのか気になるところであります。

次に、教員人事ですが、昨年度末をもって小林弘明教授が定年、石田貴士助教が中京大学への転出で、それぞれ退職されました。小林先生は2011年に本学に着任以来、農産物需給や食料農業政策にかかわる諸問題を数多く研究するとともに、博士3名、修士4名を含む、数多くの優秀な卒業生を世に送り出されました。また、その朗らかな性格（ゆるキャラ）が学生から好かれ、ゼミは毎年一番人気でした。今後もグランドフェローとして学生の指導や相談をご担当いただくことになっておりますので、よろしく願います。石田先生は、2011年に本学に着任以来、食に対する消費者行動やリスクコミュニケーションの研究に精力的に取り組み、大型の競争的研究資金を獲得するなどしました。新天地でのますますのご活躍を期待しております。ただし、研究対象としてだけでなく、プライベートでも食やお酒が大好きなため、健康にだけは気をつけるように願います（_）。

最後に研究ですが、今年度は、丸山敦史教授の研究計画が科研費の基盤（C）に採択されました。近年、世界各地で気象変動による洪水や干ばつが頻発し、感染症や食糧不足が起きています。しかしその影響は都市と農村、先進国と途上国とで大きく異なることが予想されます。この研究は、様々な角度から災害に対する脆弱なポイントの特定を目指すものです。自然災害大国である日本のノウハウの海外移転ということからも、本研究の成功が期待されます。

また、矢野佑樹講師の研究（緑の自治を促す「ナッジ×デザイン」を活用したまちづくりモデルの構築）の調査（写真）も順調に進んでおり、近々学会で発表できる見通しです。

以上、簡単な近況報告でございましたが、皆様方におかれましては、これまで同様、本学科への手厚い支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



一之江境川親水公園（江戸川区）での調査：樹木の経済価値を示すタグ（左上）を作成するための測定

園芸産業創発学プログラムの近況

園芸学科 大川 克哉

園芸産業創発学プログラムは、次世代園芸産業の担い手の育成を目的に園芸学科および食料資源経済学科に学科横断的に設置した特別教育カリキュラムです。履修学生には大学入学後の早期から園芸生産現場や専門分野に触れさせるとともに、実践的で専門性の高い演習やインターンシップなどの特別科目（9科目）が用意されています。現在、このプログラムを履修しているのは4年生6名（園芸学科4名、食料資源経済学科2名）、3年生2名（園芸学科2名）、1年生3名（園芸学科3名）です。1年次では、園芸産業の現場を知るということで先進的園芸産地視察や流通現場の見学を行っています。生産や流通現場等でのインターンシップについては、2年生には2週間、3年生には1ヶ月間を課しています。昨年度は、果樹、施設野菜および植物工場等の生産現場や体験農園NPO法人、海外開発コンサルティング企業等でのインターンシップが行われ、我が国園芸産業の抱える課題や農地の多面的利用、農業を通じた国際貢献に対する認識や理解が深められました。一方、4年生は約6ヶ月インターンシップを行いながら、インターンシップ先が抱える課題の解決を図るための調査および研究を行うプロジェクト解決型の卒業研究に取り組んでいます。昨年度は、MIRAI株式会社、共同カイテック株式会社、日清紡ホールディングス株式会社および公益財団法人園芸植物育種研究所のお世話になり、人工光型植物工場やイチゴ品種育成、屋上・壁面緑化での課題解決に取り組む十分な成果をあげています。

なお、戸定会会員の皆様には、園芸産業創発学プログラムの教育、また関連学部科目の「園芸ビジネス論」等において、多大なご協力を頂いております。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。一方、この園芸産業創発学プログラムのための園芸産業創発学プログラム選抜（特別入試）の志望者がやや減少しております。戸定会会員の皆様のお身近に、園芸産業に強い関心がある、あるいは将来の農業後継者として期待されている高校生等がおりましたら、是非ともこのような特別カリキュラムがあることを宣伝して頂けると幸いです。



葉菜類の養液栽培システムの説明を熱心に聞く1年生

環境健康フィールド科学センターの近況

環境健康フィールド科学センター長
副理事（柏の葉キャンパス） 高垣 美智子

1991年に柏の葉に移転した園芸学部附属農場が、2003年に全学の教育研究機関として改組されてから20年が経過しました。ようやく新型コロナウイルスの感染が収まり、農場実習は宿泊実習が実施できていないほかは、以前の内容で行われています。

2020年度にインターナショナルスクールへの貸与が確定したキャンパス南側敷地では、2021年度末から開始された校舎建設工事も竣工し、9月には開校が予定されています。センターの教職員、学生は、今年1月に、キャンパスの北側防風林地区に建築されたプレハブの仮設建物への引っ越し、キャンパス北側敷地への機能集約が一応完了しました。一方で、2022年度補正予算により正門脇に「バイオヘルス・オープンイノベーションハブ（仮称）施設」の建設が決まり、今年1月に設置された「園芸学部附属宇宙園芸研究センター」がその一部を使用することになりました。また、「学園の道」については当面通路としての限定利用になり、その周辺エリアの利用についての検討が進められています。併せて、柏の葉キャンパスの将来計画について園芸学研究院との相談を昨年度から継続しています。このような状況ではありますが、農場実習を含めたセンターの研究教育活動をより充実化すべく、教職員一丸となって活動しています。卒業生の皆様からの一層のご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

2019年度より開始した履修証明プログラム「多様な農福連携に貢献できる人材育成プログラム」は、オンラインと対面でのハイブリット・プログラムを3コースに拡大して実施しており、内容の充実化、OBネットワークの構築を進めています。また、今年3月から、ネットワーク強化と活動広報のために、「ノウフクマルシェ@柏の葉キャンパス」を定期的に土曜日に開催することになり、様々なセクターから参加してもらっています。

薬用植物に関しては、薬用植物園がキャンパス北側敷地に移転されほぼ整備が完了しました。また、センター内に設立された「一社）日本薬用機能性植物推進機構」と連携して、薬用植物・機能性植物の種苗開発と苗生産は継続して行なわれ、全国各地で栽培が進められています。

農林水産省の植物工場拠点事業に関わっては、履修証明プログラムや学部教育との連携が継続されています。海外からの来訪も再開したことから、海外協定校からの教員や学生への植物工場や施設園芸に関わる短期プログラムも継続して実施しています。

今年度11月に、榎本秀雄技術専門員が全国大学附属農場協議会の「全国大学農場技術賞」を受賞されることが決まりました。これまでの農場管理、実習教育へのご貢献に感謝申し上げます。



2023年6月 移転した薬用植物園



2023年4月29日 ノウフクマルシェ

令和4年度群馬県支部総会オンライン開催

群馬県支部 榎川 聡 (院自後平12)

群馬県支部では、令和4年度の支部総会をZoomによるオンラインで開催しました。コロナ禍で対面での総会がなかなか開催できない中、初の試みとして行いました。Zoomは、必ずしも支部会員の皆さんが慣れているツールとは限らないことが心配でした。案内通知には、簡単に参加可能であること、事前に操作法をアドバイス可能なことなど、丁寧な内容を心がけました。当日は、会員15名の参加がありました。支部会員古澤安紀子さんによる講演「群馬県立農林大学校での仕事内容—環境制御を利用した施設野菜の栽培—」をいただき、戸定会本部からは、加藤会長と松岡園芸学研究院長にご参加いただき、園芸学部の近況をお話いただきました。オンライン開催は不慣れで、一部スケジュールが変更となってしまうところもあり、反省しているところです。次はより充実した支部総会を実現したいと思うと同時に、コロナを気にせずに対面しながらの総会ができる日を願っております。

戸定会新潟県支部の活動

新潟県支部長 齋藤 健治 (造昭50)

新潟県支部では主な活動として総会、講演会、懇親会などを隔年で実施しています。令和4年度はコロナ感染対策を行って3年ぶりの開催になりました。

7月9日に支部会員22名が参加して実施し、本部からは副会長の賀来様が来賓として参加をしていただきました。最近女子学生が半分以上になり、戸定会としても女子の活躍に期待しているとお話がありました。

今回は、長年当支部の幹事であり、県立植物園園長でもあった倉重祐二氏が、退職に伴い新潟を去ることとなったため、送別会を兼ねて行いました。

倉重氏からは「新潟の園芸の歴史」と題し講演をしていただきました。江戸時代から現在までの園芸の歴史について、ヤブコウジ、ボタン、アザレア、チューリップなどの育成、品種改良、海外からの積極的な導入など、これらの園芸植物にまつわる話は大変興味深いものでした。ただ生産量は90年代がピークであり、その後は不景気の世に伴い、近年では生産が落ちているということでした。会員の中には園芸関係の仕事の方も多く、それを実感されているようでした。今回の講演及び長年にわたる支部活動の協力に心より感謝申し上げます。

懇親会では各自の近況報告などを行い、和気あいあいとそこで話が盛り上がり、盛会のうちにあつという間に時間がたってしまいました。



参加者で記念撮影

倉重氏の講演

次の会でまた皆様とお会いできるのを楽しみにしつつ、閉会となりました。

令和4年度山形県支部の活動

山形県支部幹事長 鈴木 光則 (生物平9)

戸定会山形県支部では、令和5年2月25日に3年ぶりとなる総会、講演会ならびに懇親会を山形市で開催することができ、10名の会員が参加しました。例年であれば支部総会には本部から先生方を派遣



していただき学部の近況報告を拜聴するのですが、今回は大学入試と重なったことで調整が難しく叶いませんでした。総会では小笠原支部長から、これまで3年間の戸定会本部及び支部活動の報告や、これまで整備を進めてきた支部会員名簿に関する説明が行われた後、会則改正を含む協議事項がすべて承認されました。講演会では私から「子実用トウモロコシの乾燥」について話題提供をさせていただき、限られた時間ではありましたが参加会員と活発な情報交換を行うことができました。懇親会では久しぶりに顔を合わせる会員同士が近況について楽しく話し、また欠席の会員から事前に寄せられた近況報告について語りながら美味しい料理とお酒を堪能することができました。

今後は世の中の活動制限も緩和され、コロナ禍前のような活発な会員同士の交流が行えるものと思いますので、気軽に参加できるような支部運営を行っていきたく思います。

栃木県支部の活動

栃木県支部長 平石 厚夫 (園昭54)

栃木県支部では、令和5年7月に本部役員の方々をお招きして、総会及び講演会を開催しました。講演会では、H10年卒の寶示戸農園の寶示戸さんから、同農園のこれまでの歩みと今後の展望についてお話をいただきました。水菜やパセリ、長なすなどの自身での生産販売の様子に加え、それを活用したドレッシングやピクルスなどの6次産業化商品の開発話など内容盛りだくさんで、農業現場の第一線で支部会員が活躍する姿に大いに盛り上がりました。

また、10月には、コロナ禍で開催できていなかったため4年ぶりとなる現地研修会を開催予定であり、支部会員が活躍する現場などの視察を行い、会員間の交流を深める機会として久々の現地研修会を大変楽しみにしております。



栃木県支部総会・講演会
(令和5年7月1日)



卒業生だより



POST - CARD

原田 雄太 (応生平23・院前平25)

園田先生の下で修士までご指導いただき、現在はMeijiSeikaファルマ(株)でMRとして医薬品の営業をしております。入社以来10年弱、北海道で大いに試された後、昨年10月に東京に戻って参りました。医薬品業界の安定供給問題やDX推進など飽きない日々が続いています。私事では専ら飲み歩きに終始しているの、運動のお誘いお待ちしております。



永井 千香子 (緑環令3)

千葉市に入庁して3年目になり、現在は千葉市の花「オオガハス」の普及啓発や建物新築時の緑化指導など担当しています。オオガハスの時期にはテレビやラジオ等に度々出演したり、イベントの運営をしたりと、植物の知識だけではなく貴重な経験をさせてもらっています。これからも、積極的に知識を吸収し、緑の力でまちを盛り上げられるように尽力していきます。



吉田 浩 (化平3・院前平5)

旧農芸化学科を卒業した吉田浩と申します。卒業後は現在の日清紡ホールディングス株式会社に入社し、以来、研究開発一筋でいろいろな分野の研究開発に携わってまいりました。最近では植物工場の事業化に係わっており、30年ぶりに大学で学んだことを思い出しながら日々楽しくアグリビジネスの多角化に取り組んでいます。



勝又 未久里 (院前平22)

遺伝育種学研究室にて修士課程を修了し、現在は大阪にある種苗会社にて、主にニンジン種子の品質管理業務に就いています。実験業務を行うことが多く、在学中の経験を活かせる仕事に就けた嬉しさや、やりがいなどを日々感じています。今後も品質の良い種子を提供することで、日本の農業を少しでも支えられたらと思っています。



槌尾 健 (緑・環平20・院前平22)

再生生態学研究室を卒業後、ゼネコンの竹中工務店に入社しました。現在は特殊緑化技術の開発、雑木林や草原再生手法の研究、ランドスケープ設計など、建築とみどりに関係する様々な業務に携わっています。千葉大学の先生方や卒業生の方々にお世話になることも多く、未熟ではありますが感謝の気持ちを忘れずこれからも努力を重ねていきたいと思っています。



長島 未空 (食資令2)

岡山県にある食品・化粧品メーカーの山田養蜂場に勤めて4年目になります。外部のテレマーケティング会社の管理を行う部署に所属し、対会社間のやり取りに四苦八苦しながらも信頼関係を築いていくことにやりがいを感じています。



6月からは引っ越しを機に新たにIT会社に勤務し、1から勉強し、学んでいきます。

七五三 裕之 (食資平25)

卒論のテーマにするほどのビール好きが高じて、広島県のクラフトビールメーカーに勤めた後、現在は柏の葉キャンパス駅最寄りの醸造所でビール造りをしています。柏の葉キャンパスの農場の野菜を使ったビールを造るなど、再び園芸学部と関わりができました。ビール醸造の他にもイベント出店や営業でお店を飲み回るなど、充実したビール漬けの日々を送っています。



藤井 大輔 (生物平21・院前平23)

博士前期課程を修了後、食品メーカーに入社し製造ラインオペレーター、商品開発として7年働き、その後千葉県庁に入庁しました。印旛農業事務所での勤務を経て、現在は山武農業事務所所属し普及指導員として働いています。主に山武市の水田農業の振興や営農指導をしています。農業の現場に近いところで働くことができ、とても充実した毎日を過ごしています。



令和5年度戸定会役員

(敬称略・順不同 ★前号発行以降新任 ◎学部連携委員) 令和5.9.1現在

名誉会長 (研究院長)	◎松岡 延浩										
相談役	伊東 正										
監事	福岡 秀実		西川 嘉輝		★郡司 正博						
理事	会長	◎加藤 一郎									
	副会長	◎賀来 宏和		◎齋藤 京子		(学内) ◎江頭祐嘉合					
	常任理事	東京	矢田部正照 外木 秀明		中島 宏		濱田 豊		坂内善次郎		住吉 泰男
		千葉	奥倉 努 藤家 梓		◎金子 文宜 和田 昭通		齊藤 威		★富樫 俊彦		長嶋 孝志
		埼玉	時田 勉 吉澤 祥匡		奈良井 武		◎前田 敏之		吉岡 幸夫		間仁田 勝
		神奈川	相場 崇		◎小山 義訓		棚橋 罔成		山田 康博		中野 敏夫
		茨城	鈴木 榮 渡邊 朝治		小竹 節		◎高栖 敬		長岡 徳樹		額賀 敏
		学内	(庶務)			高橋 輝昌		★齋藤 隆徳			
	(会計)				◎小原 均		井川 智子				
	(会報・名簿)				◎三島 孔明		丸山 敦史		★相馬亜希子		★佐々 英徳
	(広報・HP)			◎古谷 勝則							
	戸定学術振興委員会			(委員長) ◎華岡 光正							
本部理事			吉岡 重明 佐藤菜穂子		萩野 一彦 富岡 典子		志賀 聡		岩上 哲也 篠崎 豊		
支部	支部長		理事								
北海道	石村 寛人		木村 篤		橋本 雅之		阿部 克巳		土谷 美紀		
青森	若宮 佳一										
岩手	佐藤 明		山口 貴之								
宮城	篠崎 淳		遠藤 進		近藤 寛		齋藤 健				
秋田	伊藤 博之		大隅 専一		山下 光弘						
山形	小笠原和博		沖田 政明		奥山 寛子		加藤 久雄				
福島	安斎 正典		草野 忠次 齋藤 勇樹		鈴木 安和		菱沼 勇		早福 晃 金成理恵子		
茨城	鈴木 榮		岡田 勉 内藤 栄		岡田 晴雄 中野 一正		田宮 賢 寺田 誠		郡司 光一 進沼 俊男		鶴長 文正 細谷 和之
栃木	★平石 厚夫		田中 敏夫 寶示戸寿弘		小池 毅		★直井 昌彦		田邊 千知		
群馬	白石 俊昌		木村 光一 木村 康夫		酒井 宏 小倉倫利子		根岸 始		村岡 邦三		
埼玉	時田 勉		岩崎 桂三 鈴木 邦彦		木口 恒夫 長谷川 勲		野原 宏		星井 静一 細井 民興		
千葉	奥倉 努		秋葉 利雄 鈴木 孝 福地 信彦		石田 和也 ★鈴木 健 松丸 恒夫		甲田 暢男 ★砂盛恵理子		越川 浩樹 曾我 浩		小滝 秀策 南雲 一夫
東京	矢田部正照		加藤 正明 馬場 勝 山下 容子		木村 栄一 平澤 貴弘 三好 貴紀		小寺 孝治 樋渡 達也		清水 政雄 前田 誠		染谷 篤 ◎町田 誠
神奈川	相場 崇		今関三貴也		鈴木 貴		松本 孝一		小田切克治		安 健夫
新潟	齋藤 健治		中野 優		森山 勉		和田 祥子		伊藤 直子		
富山	西尾 正										
石川	安田 公平										
福井	北倉 芳忠		小林 恭一								
山梨	植原 宣紘		山本 賢治		今井吉之助		岡 實				
長野	塚原 一幸		北原 千歳 西村 清利		金子 能呼 三田 毅		杉山 利広		高木幸一郎 中山 正男		
岐阜	成瀬 秀博										
静岡	大谷 徳生		石川 健一 吉川 公規		小澤 俊幸 佐原 宏康		岡村 努 永田 博之		藤浪 正康 澤野 由明		
愛知	風間 一		梶野 保光		原 幹博						
三重	堀川 義昭		田中 貞朗								
滋賀			江見 和綽								
京都											
大阪	中西 広樹		仲村 啓		當内 匡		松原 秀也				
兵庫	坂田 正史		大西 潤		原田 充		広脇 淳				
奈良	國本 佳範										
和歌山	鈴木 惣緑										
鳥取/島根											
岡山	加藤 泉		難波 久一		山田 貞宜		河田 育康				
広島	真宅 成光		立川 真成								
山口	石光 照彦		多々良健司								
徳島	中野 一雄										
香川	安藤 昭則										
愛媛	影浦 章次										
高知	楠瀬 武司		高野 恵子								

理事	福岡	濱岡 治	井上永太郎	藤井 清昭	宮本信太郎	
	佐賀	久保 和則				
	長崎	浜岸 利昭				
	熊本	五嶋 映司	清住 昇	坂口 信夫		
	大分	志手 博	伊東 壯			
	宮崎	武内 和俊	押川 裕文	中武 卓博		
	鹿児島	城戸 清志				
	沖縄	花城 良広				
海外支部	中国・北京	安 玉堯				
	・南京	朱 月林				
	台湾					
	韓国	全 昶厚				
学内理事 ◎学部連携委員	秋田 典子	加藤 顕	齋藤 雪彦	◎高垣美智子	野村 昌史	百原 新
	天知 誠吾	★加川 夏子	坂本 一憲	高橋 一聡	◎華岡 光正	八島 未和
	井川 智子	菊池 真司	櫻井 清一	高橋 輝昌	濱 侃	柳井 重人
	岩崎 寛	木下 剛	佐々 英徳	★高橋 秀幸	彦坂 晶子	矢野 佑樹
	上原 浩一	栗原 伸一	椎名 武夫	竹内 智子	平井 静	吉田 行郷
	宇佐見俊行	★黒沼 尊紀	穴戸 雅宏	武田 史朗	深野 祐也	吉田 英生
	梅木 清	國分 尚	島田 貴士	長 泰行	◎古谷 勝則	渡辺 均
	◎江頭祐嘉合	児玉 浩明	霜田 亮祐	塚越 覚	◎松岡 延浩	渡辺 正巳
	近江 慶光	後藤 英司	章 俊華	出口亜由美	◎丸山 敦史	渡辺 洋一
	大川 克哉	◎小林 達明	浄閑 正史	土肥 博史	◎三島 孔明	
	小川 幸春	★近藤 悠	相馬亜希子	★中野 明正	★南川 舞	
	◎小原 均	齋藤 隆徳	園田 雅俊	野田 勝二	宮原 平	

戸定学術振興委員会	(委員長)	◎華岡 光正			
		江頭祐嘉合	椎名 武夫	齋藤 雪彦	吉田 行郷

※戸定会は各都道府県で活動しております。支部連絡先につきましては、戸定会事務局へお問い合わせください。

令和5年度 戸定会理事会総会報告

令和5年度の戸定会理事会総会は4年振りに対面で開催しました。

日時：令和5年6月10日(土) 13:00～14:10
 場所：千葉大学園芸学部 100周年記念戸定ヶ丘ホール
 出席者：71名(学外62名、学内9名) 委任状：147名
 (理事総数281名)
 司会：江頭祐嘉合学内副会長

- 開会の辞：賀来宏和副会長
- 戸定会名誉会長挨拶：松岡延浩名誉会長(園芸学研究院長)から挨拶
- 戸定会会長挨拶：加藤一郎会長より挨拶
- 議長選出：慣例に従い戸定会会長が議長に選出
 議事録署名人選出：秋田県支部長伊藤博之氏
 山形県支部長小笠原和博氏2名選出

- 議事：
 - 第1号議案 令和4年度戸定会会務及び事業報告 古谷勝則広報担当
 令和4年度戸定学術振興委員会事業報告
 華岡光正戸定学術振興委員長
 - 第2号議案 令和4年度戸定会会計決算報告 小原均会計担当
 - 第3号議案 令和4年度戸定会会計監査報告 福岡秀実監事から報告
 - 第4号議案 令和5年度役員案 江頭祐嘉合学内副会長
 - 第5号議案 令和5年度戸定会会務及び事業計画案 高橋輝昌庶務担当
 令和5年度戸定学術振興委員会事業計画案
 華岡光正戸定学術振興委員長

・質問①学生の研究助成金が本年度は一件あたり3万円に減額された理由について、申込み件数が増加したため助成金額を減額し、多くの学生に支援するため採択件数を増やした。

・質問②前期・後期の募集時期の採択件数について、前期・後期で定員は設けず状況に合わせて柔軟に対応する。
- 第6号議案 令和5年度戸定会会計予算案 小原均会計担当
 以上、1号議案から6号議案まで挙手による賛成多数で承認された。

- 報告：
 - 戸定会一般社団法人化の在り方(中間とりまとめ)
 齋藤京子副会長
 当面は任意組織のまま活動するが、法人化が必要になった場合に備えて、高機能な会計ソフトを導入して詳細な会計処理を行えるよう対応しつつ、引き続き検討を続ける。
 - 戸定会所有データの用途及び貸し出しについて 齋藤京子副会長
 戸定会所有データの貸出については、個人情報の取扱について配慮しながらも、メールでの連絡による連絡業務の軽減化、オンラインセミナーの開催での活用などのため、戸定会の保持する会員のメールアドレスが活用できるよう検討する。
 - 支部活性化について(支部長会議報告) 大分県支部 志手博支部長

午前で開催された支部長会議について、支部活性化の取り組みについて報告があった。

- *「支部総会開催特別支援金」について、本年度に限り支部総会を開催した支部に50,000円の支援は、支部としてとてもありがたいことであり、継続的に行ってもらいたい。
- *支部総会時や以外にも卒業生の職場の視察などを行い、活動テーマを決めて参加募集を促している。
- *通信費削減を目的としたLineやFacebookなどSNSの活用により、広い年代との交流を目指している。
- *役員に若手を入れ、県職員と一般企業のバランスを考えた運営をしている。
- *若手や新規支部会員の参画について、例えば在学生との交流や地元への就職について相談の機会を持つなど積極的な取り組みを試行している。
- *戸定会事務局やキャリアサポート室に学生が就職相談に訪れた場合には、地方出身者の場合、当該地方の就職情報などを尋ねるために、支部長のアクセス情報を学生に提供することが了承された。
- *各支部の総会案内や講演会などの情報を、戸定会HPで情報発信する。このため各支部から積極的に、支部の催事情報などを、戸定会事務局に提供しよう努める。
- など、それぞれの活動の現状や活性化のアイデアなどが披露され、意見交換された。
- 4) 戸定会ホームページのご案内 古谷勝則HP担当
 昨年10月に刷新された戸定会ホームページの案内があった。
 ホームページの利用用途や利用(訪問)数、新しいホームページの周知について説明及び報告があり支部総会などでの積極的な利用の喚起があった。
- 5) その他：今年度着任の本部新役員の紹介

令和4年度支部総会開催及び本部役員派遣の状況

開催日	支部名	開催場所/形態	派遣役員
令和4年7月9日	新潟県支部	新潟市万代市民会館 越後まる松	賀来 宏和(副会長)
令和4年10月22日	栃木県支部	宇都宮市 ニューみくら	加藤 一郎(戸定会会長) 松岡 延浩(研究院長)
令和4年11月19日	群馬県支部	オンライン開催	松岡 延浩(研究院長)
令和5年2月25日	山形県支部	山形市 ホテルNEW最上	派遣なし

※各支部総会開催報告を戸定会ホームページに掲載しております。
<https://dousoukai.site/tojokai/>

高知県支部だより

高知県支部長 楠瀬 武司 (農別昭43)

高知県支部では、現在30名程が在籍し、県内外で農業経営や関連団体及び企業で活躍しております。主な活動は年1回支部会を開催し、活動報告や近況報告、意見交換や懇親会などを行っております。

筆者の近況ですが、数年前に息子夫婦土居智博、典子(園別平14)に経営移譲し、大好きな釣りや晩酌をしながら経営を手伝っております。

ユリ業界のトピックとして、「八重咲きのオリエンタル」、「葯はあるが花粉の粉がでないポーレンフリー」などが増えてきております。(花卉が花粉で汚れることなく美しく、かつ花粉の取る手間もいらないので省力化)



当園も主軸の一重咲きは大事にしながらも、八重咲きオリエンタルリリーのローズリリーシリーズなどを生産に取り入れ、時代のニーズに合った生産をしていきたいと思います。

(文章：土居光博 (農別昭47))

卒業生からのメッセージ

志手 博 (生管昭52)

大学では教員不足が深刻化しています。何が問題なのでしょうか？

毎年1%ずつ運営費交付金を削減される大学予算は、教員の確保もままならないほど逼迫しています。潤沢には言いません、しかし削減の結果として基礎研究が疎かにされ、産業に直結した研究しか予算が確保できない

状況では、10年後、20年後の日本の大学は最高学府と呼べない企業下請け研究機関になっていそうです。

学問の根本が分からない政治家が予算に口出しするような現在の「選択と集中」は、都合の良し悪しで決めても良い、と聞こえます。

お願いです。もっと自由に研究ができるように、学生をきちんと教えらるる教員数が確保できるように、皆様には様々な場面(表現の場)で声をあげていただきたいと思ひます。金がなくて大学が減れば日本も減るぞ、と。

就職支援について

キャリアサポート室 望月 文昭



4月から鈴木弘孝先生の後任を務める望月文昭と申します。緑風会館1階、生協購買部の隣の部屋で、週2回、エントリーシートの添削など就活中の学生のお手伝いや相談などに対応しています。

エントリーシートとは、企業が書類選考のために最初に求める書類のことで、我々が学生だった頃の「履歴書」に相当します。

履歴書は手書きが当たり前でした。学歴や志望動機などを誤字に気を付け楷書で丁寧に書く作業に苦労した方も多いのではないのでしょうか。一方、現代のエントリーシートはパソコンで作ったデジタルデータで提出することができます。手書きの面倒は無いし、字の巧拙を心配しなくていい分、学生の負担は減ったように思われるかもしれませんが、履歴書には無かった《学生時代に力

を入れたこと(ガクチカ)》とか《自己PR》を、オリジナリティを出しつつ300文字程度で作文しなければなりません。また、企業によっては、《仲間と力を合わせて頑張ったこと》とか《あなたの強みが発揮されたエピソード》、食品メーカーからは《食に関する思い出》など、独自の設問が追加されます。手書きの面倒から解放されたとはいえ、限られた文字数のなかで分かり易い文章を書く作業はとても大変です。特に理系の学生には負担が大きいと思うのですが、園芸学部の就活生は真面目に頑張っており取り組んでいます。

戸定会会報の読者の多くは履歴書世代であり、現役世代の就活環境をご存知ないのではないかと思います。エントリーシートの説明をさせて頂きました。

では、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

会員訃報

前号発行後、ご逝去の報告をいただきました。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略：令和5年7月末現在)

〈園芸学科〉

園昭19 田代 信義
園昭20 村田 文雄
園昭22 石井 賢二
園昭22 武田 富夫
園昭25 大塚 久郎
園昭26 金子與志雄
園昭26 神山 利一
園昭29 鈴木 司
園昭30 池田 東輔

園昭30

山内 正彦
園昭31 鈴木 孝仁
園昭31 都丸 勇
園昭34 大川 寿一
園昭35 中山 武久
園昭36 金子 欽吾
園昭39 末松 茂孝
〈農芸化学科〉
化昭20 小野 昌美
化昭23 鈴木 素一

化昭28

上甲震太郎
化昭28 山本福太郎
化昭38 荒井 紘一
〈総合農学科〉
総農昭32 大塚 清
総農昭33 高橋 修
総農昭34 花岡 喜重
総農昭36 渋谷 昇吾
総農昭39 大矢 慎吾
総農昭40 八重樫博志

〈農業生産管理学科〉

園昭34 吉田 秀夫
生管昭46 野中 英夫
〈農業別科〉
農別昭24 石倉 茂男
農別昭28 山本 慎吾
農別昭29 安齋 徳夫
農別昭30 井西 孝治
農別昭32 在原 強
農別昭32 千藤 昌美
農別昭34 伊藤 源一

農別昭34

吉田 秀夫
農別昭37 軽部 充章
〈園芸別科〉
園別平3 藤波 由佳
園別平20 神尾 徹
〈大学院〉
造専昭49 井上 康平

食料資源経済学科3年 大江 夏菜

人類が生きていくために常に必要な農業を支えるシステムに関心があり、農業経済学及び農業経営学、協同組合学を学びたかったので入学しました。また入学前に、様々な関わり方ができる農業は就職が難しい失業者や障害者が働く場に適していて、人手不足解決にも繋がると考えていました。入学後に、それが農福連携と呼ばれ実現していると知り、現在学んでいます。

栽培・育種学領域 院前期1年 A・H

学部のとよからの研究を続けたいと思い、園芸学研究科に入学しました。大学4年生の後半になった頃ようやく自分がおこなっている研究の内容がみえてきて、これからさらに実験が面白くなると思いました。研究では、植物の胚発生に関する遺伝子を使ってバイオテクノロジーによる半数体作出法の構築をおこなっています。

食料資源経済学科4年 N・R

農業経済学を学ぶために入学しました。きっかけは、理系であっても経済学を学ぶということで農業経済学に興味を持つようになりました。講義では私が考えていた以上に数学や統計学の知識を使うものが多かったのですが、数学が好きな私にとってはとても興味深い内容でした。現在は環境経済学の分野に興味を持っているので、卒業論文ではその分野に沿ったものに取り組もうと考えています。

園芸学科4年 T・K

私は植物に関する幅広い知識を得ることと、育種に関係する研究をすることを望み、園芸学部に入りました。これまで園芸学部で多くの授業を受講させていただき、植物生理や作物の栽培方法など多くの知識を得られたと思います。また、研究室分属では育種学分野の研究室に所属させていただき、遺伝子組換えなど希望通り育種に関係する研究ができており、満足しています。

食料資源経済学領域 院前期2年 木下 駿

より専門的な研究・勉強をしたいと思い園芸学研究科に進学しました。現在は、「衝動買い」をテーマに研究をしています。また、データサイエンス領域の勉強にも興味があるため、他研究科の講義を受講するなどして勉強に励んでいます。興味関心のある分野に対して時間をかけて向き合える大学院での生活に充実感を覚えながら日々を過ごしています。

緑地環境学科4年 星田 遼太

私は高校時代からSDGsに関心があり、地球環境問題について学ぶため、緑地環境学科に入学しました。入学後に地域で環境問題に取り組む市議会議員の下でインターンシップを経験し、次第に環境の改善、延いては環境活動そのものが人の健康にも良いことを確信するようになりました。また、現在は緑地福祉学研究室で自分の研究と並行して、看芸ガーデン・健康屋台といった現場での活動にも積極的に参加しています。

応用生命化学科4年 Y・K

高校の頃は生物と化学が好きだったので、卒業後は専門的知識を身につけたいと考え園芸学部を志望しました。園芸学部に入学後、主に分子生物学を学びながらRNAの研究を行っています。研究室では実験の他にも研究内容のプレゼンの作成や、専門分野の論文を読むことで論理的思考力が身につくため、とてもためになっています。

緑地環境学科4年 松本 瑞紀

地球温暖化の防止に携わりたい、特に、緑地環境がどの程度カーボンニュートラル社会の実現に貢献しているかについて学びたく、入学しました。炭素を蓄積する土壌の性質について知り、二酸化炭素を吸収する植物周辺の環境条件を分析することに注力してきました。現在は、芝生地の土壌が蓄積することのできる炭素量について研究を進めています。

応用生命化学科4年 T・K

将来医薬品や食品に関する仕事がかかったので、食品化学や生物化学、有機化学などを総合的に学ぶために園芸学部に入りました。現在は所属している研究室において、脂肪肝や薬物誘発性肝障害に対する食品成分の機能解析や細胞を用いたin vitroモデル系の構築などに注力しています。

環境造園デザイン学領域 院前期2年 北嶋 萌絵

私は、学部で土木や建築を学んだ背景から、自然と人を安全に、心地よく結び付けるようなランドスケープデザインをできるようになりたくて園芸学研究科に入学しました。現在は、修士制作に向けて、自然が地形をつくる力や生み出された地形について力学的・地学的・美術的な観点から調べ、自然の力が空間の魅力として現れてくるようなデザインに繋げようとしています。

園芸学科4年 Y・S

植物、特に野菜について学びたくて入学しました。実習や講義を受けているなかで、また、自分の研究のために植物を栽培しているなかで興味のある分野が増えていき、今では、特に植物の病理と遺伝に興味を持っています。卒論のために自分の研究を進めながら、興味のある分野について知識をつけていきたいと考えています。

応用生命化学領域 院前期1年 S・K

園芸学部のみキャンパスが独立しており、総合大学でありながら単科大学のような良さも味わえるのではないかと思います。実際は教授との距離も近くアットホームな雰囲気の中大学生活を送っています。学部2年生からはコロナ禍での大学生活となりもどかしさもありましたが、限られた中で何ができるのか考えながら生活してきました。残り1年半の学生生活も、時間を大切にしながら有意義に過ごしたいです。

国際交流

白雪 (緑地環境資源学領域・院前期1年)



私は中国の大学三年生の時に「生態学基礎」という授業で初めて生態学に触れ、その時から生態学に興味を持っています。千葉大学大学院園芸学研究科に進学した後、植物や土壌に関する専門知識を学んでいます。学部で学んだ専門知識は大学院園芸学研究科での研究内容とはあまり

関連性がありませんでした。そのため、大学院で必要になる知識や研究手法を一から学び直す必要があり、最初は不安や戸惑いがたくさんありました。しかし、研究室の先生や学生たちがたくさん助けてくれました。先生方は関連論文をたくさん推薦くださり、質問に対して詳しく答えてくれました。日本での学生生活にも徐々に慣れてきました。お世話になった皆さんにとっても感謝しています。日本に留学することで、視野を広げ、自分の足で立つことを学んでいます。在学期間はあまり長くないので、できることを悔いのないように頑張りたいです。

遠藤 優雨 (園芸学科4年)

私はカナダのフレイザーバレー大学に約4ヶ月間留学していました。キャンパス内の寮に住み、現地の学生と授業を受けました。私は土壌学、カナダの地理、環境問題とそのストラテジーについて、の3つ授業を受講しましたが、私のような交換留学生にはいなかったように思います。特に印象に残った授業内容は、自分で採取した土壌を用いて栽培実験・土壌解析を行いその結果についてプレゼンテーションをしたことです。英語での専門科目の受講は初めてでしたが現地の学生と同じ授業を受講できたということは自信につながりました。



韓国、中国、タイ、クウェート、トルコなどの国々から来た友人ができ、各国の文化を学ぶことができました。また、日本国外での長期滞在は初めてだったため、遠くから母国を見つめ直す良い機会になりました。長期間海外で過ごし、日本の便利さやサービスの細やかさ、食の美味しさなどの長所にあらためて気づくことができました。



垂井 朝姫 (応用生命化学科4年)

オーストリアとポーランドでウクライナ支援をした際に自分の英語に大きな責任を感じ、もっと自信を持って英語を話したいと思いイギリス留学を決めました。



Londonでの自由時間、Sheffield大学での授業、現地学生との交流、ホームステイなどでは積極的に会話することを心がけ、多様な考え方に触れました。また、ストライキで休校になった時にはクラスメートと初めてのアイススケートに挑戦し、大雪の日にはホストファミリーと坂道を滑りながら買い物に行き、乗車時に手を挙げることを知らずにバスが目の前を通りすぎた時には駅まで1時間以上歩きました。初めてで分からないことだらけの生活が新鮮で刺激的でした。私は入学後の東京パラリンピックボランティア、ウクライナ支援、短期留学の経験から、障がいの有無、国籍、人種でその人を判断できないこと、国境を越えて人々は助け合っていることを実感しました。今後は世界に恩返しをしていきたいです。

川崎 凱 (食料資源経済学領域・院前期2年)

私は修士研究として、GISやリモートセンシングを用いて、洪水に脆弱な地域のリスク評価と、村単位の防災意識の違いが被害に与える影響を明らかにしています。



そのため、昨年11月～今年1月にかけてフィリピン大学ロスバニョス校に研究留学し、GIS解析とフィリピン・ラグナ州にて災害対策のインタビューを実施しました。フィリピンでは毎年多くの台風が襲撃し、甚大な被害をもたらしています。その要因の1つとして、災害対策が不十分であることも挙げられます。インタビューの結果、住民がハザードマップを持っていないことや、排水施設の掃除が不十分であることなどが明らかになりました。十分な対策があれば、防ぐことの出来た被害もあると感じました。しかし、現地の方の温かい人柄や優しさにも触れることが出来ました。これからも、研究に熱心に打ち込み、その成果によって現地で優しくしてくださいました方々に、少しでも恩返しが出来よう努めたいと思います。

令和4年度 戸定学術振興委員会 事業報告

1. 海外渡航助成金

- ・申請1件あり、科研費での支払いのため辞退

2. 私費留学生奨学奨励金授与 2名：40,000円（1名あたり20,000円）

No.	氏名(フリガナ)	学科	性別	国籍
1	TAO XICHEN (陶 希辰) (トウ キシン)	緑地環境学科	男	中国
2	TONG YANG (トウ ヨウ)	緑地環境学科	女	中国

3. 講演会助成金 2件：39,000円（1講演あたり上限20,000円）

No.	申請者	講師氏名・所属	講演課題	講演日・場所
1	南川 舞	土松 隆志 東京大学大学院理学系研究科 准教授(当時)	被子植物における多様な交配様式の進化	12/22 E-412教室
2	武田 史朗	金香 昌治 (株)日建設計 都市・社会基盤部門 都市デザイングループ ディレクター	境界を越えるランドスケープデザインのちから	1/12 D-112教室

4. 学生の研究助成金 22件：853,701円（上限50,000円・実費支給）

No.	氏名	学年	研究グループ 指導教員	学会名◎演題(研究テーマ)	開催地 期間
1	八木 志文	院前期 1年	農産食品工学 椎名 武夫	日本食品保蔵科学会第71回大会 ◎紫外線UV-B照射がカットキャベツの総アスコルビン酸含量および保蔵性に及ぼす影響	北海道文教大学(恵庭市) 6/18-6/19
2	吉田 知世	院前期 1年	農産食品工学 椎名 武夫	日本食品保蔵科学会第71回大会 ◎カットアボカドの品質変化に及ぼす温度と包装の影響	北海道文教大学(恵庭市) 6/18-6/19
3	高尾 郁歩	院前期 1年	食品栄養学 江頭祐嘉合	第76回日本栄養・食料学会大会 ◎加熱処理乳酸菌KDPとグアーガムの併用による高脂肪食摂取マウスのコレステロール低下メカニズムの検討	武庫川女子大学 中央キャンパス(西宮市) 6/11-6/12
4	杉本 迅	院前期 1年	植物細胞工学 井川 智子	日本植物学会第86回大会 ◎雄性受精因子GCS1の相互作用因子の探索と解析(2)	京都府立大学 下鴨キャンパス(京都市) 9/17-9/19
5	佐々木 圭	院前期 2年	環境造園管理学 柳井 重人	日本造園学会2022年度全国大会 ◎首都圏及びその周辺における伐採木・剪定枝活用の実態と課題	北海道大学農学部(札幌市) 6/19
6	小山 翔平	院前期 1年	植物細胞工学 井川 智子	日本植物学会第86回大会 ◎非PGR下での植物体再生システムの構築と汎用性拡大の評価	京都府立大学 下鴨キャンパス(京都市) 9/17-9/19
7	飛田 まい	院前期 1年	蔬菜園芸学 中野 明正	根研究学会第55回根研究集会 ◎キュウリの溶液栽培におけるケイ酸資材の簡易的導入法の効果	オンライン開催 6/4
8	加藤 舞	院前期 1年	生物化学 宮原 平	第39回日本植物バイオテクノロジー学会大会 ◎スイートピーの花色素合成にかかわる補足遺伝子Pの調査	大阪公立大学 中百舌鳥キャンパス(堺市) 9/11-9/13
9	安間 美菜	院前期 1年	生物有機化学 土肥 博史	第41回日本糖質学会年会 ◎o-ホルミルフェニルチオ糖を用いた効率的糖鎖合成法の開発	大阪大学 コンベンションセンター(吹田市) 9/29-10/1
10	齋木祐志郎	院前期 1年	食品栄養学 平井 静	第76回日本栄養・食料学会大会 ◎Clostridium isatidis 近縁菌の高脂肪食誘導性肥満マウスにおける機能性評価	武庫川女子大学 中央キャンパス(西宮市) 6/11-6/12
11	真野 温人	院前期 1年	緑地生態学 渡辺 洋一	日本植物学会第86回大会 ◎日本の遺存固有種オサバグサを含むケシ科の系統関係の推定	ポスター発表はオンライン形式 9/15
12	佐藤 樹	院前期 2年	庭園デザイン学 章 俊華	2022年度日本造園学会全国大会 学生公開デザインコンペ ◎共栄のハビタット	恵庭市民会館(恵庭市) 6/17-6/18
13	櫻庭 由樹	緑環 4年	庭園デザイン学 章 俊華	※5名1チームで参加し、全員で発表	
14	北嶋 萌絵	院前期 1年	庭園デザイン学 武田 史朗	2022年度日本造園学会全国大会 学生公開デザインコンペ ◎「私」の育てる恵庭 在来種参加型花生産によるまちづくりネットワークの拡大	恵庭市民会館(恵庭市) 6/17-6/18
15	井田 衿花	院前期 1年	庭園デザイン学 武田 史朗	※5名1チームで参加し、全員で発表	
16	池上 慧	院前期 2年	花卉園芸学 三吉 一光	園芸学会令和4年度秋季大会 ◎ダリアへの接ぎ木によるコダチダリアの花芽形成の誘導	山形大学 鶴岡キャンパス(鶴岡市) 9/10-9/11
17	中田 光	院前期 1年	生物有機化学 土肥 博史	第41回日本糖質学会年会 ◎立体選択的アジドニトリ化によるN-アセチルマンノサミンの効率的合成法の開発	大阪大学 コンベンションセンター(吹田市) 9/29-10/1
18	安藤 華	院前期 2年	微生物工学 天知 誠吾	日本微生物生態学会第35回大会 ◎発酵細菌Pelosinus sp. IPA-1株における新規ヒ酸還元メカニズムの解明	札幌コンベンションセンター(札幌市) 10/31-11/3
19	神原 遼也	院前期 2年	微生物工学 天知 誠吾	日本微生物生態学会第35回大会 ◎Geobacter sp. SVR株のアンチモン呼吸条件下におけるタンパク質発現	札幌コンベンションセンター(札幌市) 10/31-11/3
20	若林 亮	院前期 2年	食品栄養学 江頭祐嘉合	第22回国際栄養学会議 ◎紫外線を照射した赤シソがマウスの四塩化炭素誘発性肝障害に及ぼす影響	ポスター発表はオンライン形式 12/6-12/11
21	斎藤 遥	院前期 1年	分子生体機能学 華岡 光正	第64回日本植物生理学会年会 ◎紅藻シソンにおけるレトログレードシグナルによる光転写制御とヘムの関与	東北大学 川内キャンパス(仙台市) 3/15-3/17
22	山口 皓平	院前期 2年	食品栄養学 平井 静	第40回日本肥満症治療学会学術集会 ◎妊娠期の栄養制限により変化した腸内細菌叢が宿主の代謝に及ぼす影響	那覇文化芸術劇場なはーと(那覇市) 12/2-12/3

令和4年度卒業生・修了生の進路（就職・主な内定先）

	園芸学科	応用生命化学科	緑地環境学科	食料資源経済学科	大学院（博士前期課程）	
農業・林業	中央畜産会			サカタのタネ 木田屋商店	カネコ種苗 サカタのタネ	
建設・造園・設備・環境			住友林業緑化 大和ハウス工業 日比谷アメニス 岡本環境造園 西武造園			西武造園 東武緑地 広州市市政工設計 研究院有限公司
食料品・飲料・たばこ・飼料製造業	栄屋乳業 雪印メグミルク ニッポン			大東製糖	Jオイルミルズ アリメント工業 かどや製油 日本食研ホールディングス ハウス食品 ヒゲタ醤油 ベースフード ユニテックフーズ 伊藤ハム 丸美屋食品工業 月島食品 日清シスコ カルビー 日本水産 理研ビタミン	
印刷・同関連業				トッパングラフィック コミュニケーションズ		
化学工業、石油・石炭製品製造業	住化農業資材	日本エマルジョン			エコラボ合同会社 キミカ ノエビア 昭和電工 太陽ホールディングス 日光ケミカルズ 日本化薬	
その他の製造業					レンゴー株式会社	
電気・情報通信 機械器具製造業	富士ソフト			キーエンス		中国電力集団華北電力設計院
輸送用機械器具製造業	神奈川トヨタ自動車					UDトラックス
情報通信業	ALH株式会社 インフォテック・サービス テクノ・セブン 楽天グループ 農中情報システム	NMSエンジニアリング NTTデータ・フィナンシャル ・ソリューションズ	ビジネステクノクラフツ 近鉄コスモス TOKIUM 日本IBM	株式会社BLUE NTTデータ コムチュア ハイディメンション 日本IBM 日本テクノ開発	SCSK 東京メトロポリタンテレビジョン NTTコムウェア 富士通	ISTソフトウェア ディー・トレンド・ジャパン パナソニック インフォメーションシステムズ 電通国際情報サービス Net Ease Games ハイシンクジャパン 穎光社 内田洋行
卸売業		株式会社高山	伊藤忠エネオス	三菱食品	稲畑産業	
小売業				ライフコーポレーション	良品計画	無印良品(上海) 商業有限公司
金融業	国際協力銀行 商工組合中央金庫	JALカード		みずほフィナンシャルグループ 七十七銀行 日本政策金融公庫		日本銀行
保険業				ソニー生命		第一生命
不動産取引・賃貸・管理業			都市再生機構			西武リアルティソリューションズ
学術・開発 研究機関					国立研究開発法人 科学技術振興機構 国立研究開発法人農業・ 食品産業技術総合研究機構	
その他の 専門・技術 サービス業	アコーディアゴルフ シンプレクス	エイツーヘルスケア エムスリーキャリア	ホワイトエッセンス アークニュー 東京設計事務所 日本工営都市空間	KPMG税理士法人 リクルート	パーソルキャリアブティック	アクセンチュア 株式会社ポリテック ・エイディディ 積水ハウス Integrated Planning and Design(Shanghai) Shenyang Urban Planning & Design Institute 日建設計 ヒュマス 朝日航洋 建設技術研究所 蘇州市園林設計院 戸田芳樹風景計画 中国雲南省設計院
社会保険・社会 福祉・介護事業				社会福祉法人くりのみ園 (就労継続支援事業所)		
複合サービス 事業	日本郵便			日本園芸農業協同組合連合会	全国農業協同組合連合会 愛知県経済農業協同組合連合会	
国家公務	農林水産省 消防庁	国土交通省関東地方整備局	国土交通省 農林水産省 林野庁	国土交通省東京航空局 農林水産省	フィリピン共和国農業省	国土交通省 警察庁
地方公務	三重県庁 千葉県庁 印西市役所		東京都庁 千葉県庁 福島県庁 千葉市役所 足立区役所 習志野市役所	千葉県庁 神奈川県庁 新潟県庁 山形県庁 神栖市役所	東京都庁 千葉県庁	千葉県庁

ご存じでしたか 我らが同窓生探訪 ③

取材者：戸定会会長 加藤 一郎（生管昭46）

東京の交通のかなめの地下鉄。アジアで最初の地下鉄を1927年（昭和2年）に上野・浅草間で開業させた「地下鉄の父」と呼ばれる早川徳次（のりつぐ）氏は園芸学部生産管理学科1971年卒の早川史徳君の祖父です。徳次氏は1881年（明治14年）山梨県東八代郡御代咲村（現在の笛吹市）の村長の家に生まれ、甲府中から早大法科卒業後、満鉄総裁後藤新平の秘書となり、欧米視察を通じて地下鉄に瞳目し、東京市にも地下鉄が必要との信念から1923年関東大震災、1929年世界大恐慌の苦境を乗り越えて地下鉄を開通させました。東京メトロ日比谷線銀座駅のコンコースには氏の功績をたたえた胸像が設置されています。

徳次氏は1942年に各界の事業者、学者を招き山梨の若者に講義する「青年道場」を開設しました。1943年東京空襲が頻発し、祖母とご両親は講師宿泊所に疎開し、史徳君は小学校4年まで同地で育ちました。



（写真1）徳次氏の銀座駅の銅像

Q1 祖父徳次氏の遺品はどのように保管され、現在、講師宿泊所はどうなっておりますか。

史徳氏：遺品のほとんどが山梨県立博物館に寄贈され、また講師宿泊所は国の文化財に登録され、常時は戸締りして無人となっておりますが、春と秋に地元、御代咲村（現笛吹市）からのご要望もあり、一般公開しております。そこには2年近くの海外視察に使用した備品、ロンドン・ベルリン他で購入した土木建築・鉄道関連の書籍などが展示されております。

ることが許されない状況の中で園芸学で何を学びたいというよりも、現役入学が優先したように思います。

卒業後、私の祖父徳次が一時、バス・ハイヤー事業にかかわっていた関連もあり、父が中古バスの販売事業を始めたので、その後を継いでおります。園芸学部で学んだことを直接活かしてはおりませんが、友人にも恵まれその選択は正しかったと思っております。

Q2 徳次氏の文化財登録された宿泊所、付随の庭は現在どのような状況なのでしょう。

史徳氏：大雪による庇の崩壊、漆喰壁の剥離、台風による屋根瓦の損傷など修理を続けながら維持管理をしております。庭には極力手のかからない梅、柿、柑橘などを少数植えて草刈りや消毒に月2回ほど通っております。近隣の桃、葡萄園も後継者がなく困っているのが現状です。これらの果実園を集約して、文化財の建物は保存しつつ、園芸学部の実習農場として活用して頂ければありがたいと思います。



（写真2）徳次氏のパスポート（史徳氏蔵）

Q3 史徳君はなぜ千葉大学園芸学部の入学を希望し、また現在、どのような仕事をしておりますか。

史徳氏：我々の世代は団塊の世代と呼ばれ、大学入試も厳しい時代でした。家庭の事情もあり、浪人す



（写真3）史徳君の学生時代の写真

取材を終えて

早川史徳君は生産管理学科（1971年卒）の私の同期です。西千葉時代には彼はボート部、私は剣道部活動に全力をあげており、深い交流はありませんでした。彼は加山雄三的な雰囲気や漂わせ、スキーの腕前は1級と当時の大学紛争、園芸学部の雰囲気とはやや異質の存在でした。松戸に移り、彼とは同じ農業経済研究室（鈴木教授、宮本助教授、石川助手）に属してから交流が深まりました。当時の宮本先生も園芸学部には異質の存在であり、神奈川県葉山のマリーナに24フィートのクルーザーを所有し、週末には彼とクルージングにお供をさせていただきました。宮本先生の家にも2人で良く招待され、ご家族とも懇意にさせていただきました。この間に彼との交流が深まりました。また私たちの生産管理学科はまとまりが強く、今でも毎年クラス会を戸定祭の日に開催しております。

ホームカミングデー 2022 報告



戸定会副会長 賀来 宏和 (造昭52)



コロナ禍で2年間休止されておりました戸定祭が、3年ぶりに開催され、戸定会と園芸学部の共同企画による「ホームカミングデー 2022」が、11月5日、6日にわたって行われました。

11月5日は千葉大学のグローバル・ダイバーシティ研究者育成事業と連携しつつ、「ジェンダーギャップに対する現役学生と同窓生の認識ギャップを考える」と題して、櫻井彩乃さんの講演と各分野で活躍中の戸定会女性会員3名による就職後の体験を交えたパネルディスカッションを実施しました。(詳細はP28)



11月6日は、戸定祭に会場する市民や卒業生を対象とした「戸定ガーデンカレッジ」を行いました。プログラム1では、造園系の同窓会である二葉会との共催で、「造園と文化財～自然と人間の営みがはぐくんだ文化的景観に思いを馳せて～」と題して、造園昭和52年卒、国立文化財機構奈良文化財研究所の所長である本中眞さんによるオンライン講演会。プログラム2では、千葉大学博士研究員のMariia Ermilovaさんと木下剛研究室の雨庭組を講師に、キャンパス内で「自然観察スケッチ会～自然観察を楽しんで知識をシェア」を開催。さらにプログラム3では、園芸昭和54年卒、園芸植物育種研究所理事長の丸尾達先生による「市民農園で失敗しない野菜づくりのポイント」の講演会などが行われました。



いずれのプログラムも戸定祭に会場した多くの市民や卒業生、オンラインで視聴された多くの卒業生などにご参加いただきました。

ホームカミングデー 2023 開催について

昨年に引き続き、今年も11月4日、5日「ホームカミングデー 2023」を開催します。

会場はいずれも松戸キャンパス内「100周年記念戸定ヶ丘ホール」です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。詳細につきましては、戸定会ホームページでご確認ください。

戸定会ホームページ：<https://dousoukai.site/tojokai/>

ハイブリッドシンポジウム

11月4日(土) 13:30～15:30

テーマ：自分のやりたい仕事・今の仕事・続ける仕事

自分にとって大切な「仕事」について、先輩の経験談を聞きながら一緒に考えよう！

卒業後5年以内、10年以内の卒業生男女数名にお話をいただきます。

戸定ガーデンカレッジ2023

11月5日(日)

●プログラム1 10:30～12:00

演題：俳人小林一茶と江戸の園芸文化～菊を中心として～

講師：賀来 宏和 (造昭52・造専昭54 戸定会副会長 千葉大学大学院客員教授)

内容：講師が本年3月に上梓した『一茶繚乱～俳人小林一茶と江戸の園芸文化』に基づき、江戸の園芸文化やその書籍に至った松戸との関わりについてお話しします。



●プログラム2 13:00～13:45

演題：ご存じですか？「トクホ・機能性表示食品」

講師：岸野 恵理子 (化平6・化専平8 地独)東京都立産業技術研究センター食品技術センター副主任(研究員)

13:45～14:30

演題：腸内環境から考える、予防医学と栄養

講師：原 千里 (院園前令3 千葉大学医学薬学府先進予防医学共同専攻予防医学センター博士後期課程在籍中)

●プログラム3 15:00～16:30

演題：ハンギングバスケットなどで暮らしを楽しむ！

講師：武内 嘉一郎 (園昭51・日本ハンギングバスケット協会名誉会長・前理事長)



※車や自転車でのご来場はご遠慮ください。

千葉大学国際高等研究基幹・社会価値創造研究支援プログラム 「気候変動時代に応えるレジリエント・ランドスケープ学の創造」

緑地環境学科 教授 秋田 典子

昨年度から始まった、中山学長のリーダーシップに基づき千葉大学を代表する分野における飛躍的な展開を期待する先鋭的研究を支援する、千葉大学国際高等研究基幹（IAAR）の社会価値創造プログラムに、2023年4月に園芸学研究院から2つ目のプログラムとして、秋田典子（環境造園管理学）が代表を務める「気候変動時代に応えるレジリエント・ランドスケープ学の創造」が採択されました。メンバー構成は、分担者として園芸学研究院の武田史朗（環境造園デザイン学）、木下剛（環境造園デザイン学）、研究協力者として小林達明（緑地環境資源学）、さらに他機関連携研究者として、フランス、イギリス、オランダ、ドイツのランドスケープ分野を代表するトップクラスの研究者に参画頂くことを予定しています。

本研究プログラムでは、気候変動による災害の多発、生物多様性の損失、地域格差の拡大という世界共通の空間課題に対して、自然環境と人の暮らしが調和した空間形成の知識・技術に関して最も長い歴史を有し、これらの課題に統合的・包括的・実践的に応えることができる唯一の学術領域である「ランドスケープ学」が、当該学術領域における知見と実践技術の両輪を駆使しながら新たな学問領域を創出し、その解決に取り組んで行こうとするものです。本研究ではレジリエンスという生態学概念を空間計画・デザイン理論に反映させ、これを実践することを試みます。

千葉大学園芸学部は日本で国立大学唯一のランドスケープ学専攻を持つ学部であり、園芸学部の存在は千葉大学の特徴の1つでもあります。本研究では千葉大学大学院園芸学研究院の研究メンバーが世界のランドスケープ学研究者と連携し、国際的イニシアチブを取りながら「レジリエント・ランドスケープ学」という気候変動時代の新たな空間形成理論・技術を創造することを目指します。具体的には、千葉県の都川や京都府の桂川等を事例として取り上げながら、学生の演習とも連携し、学びと創造を深めてゆきます。2023年11月にはフランスとオランダから研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催する予定です。



ケーススタディ対象地の都川

ゲノム情報を利用した果樹の効率的な品種改良法の開発 ～芽生えの段階で将来できる果実の特性を予測する～

国際高等研究基幹（大学院園芸学研究院 兼務） テニュアトラック准教授 南川 舞

果物は私たちが健康で豊かな食生活を送るうえでの必需品です。高品質な新品種を迅速に育成することが求められています。しかしながら、果樹は芽生えから結実するまでの時間が長く、交雑育種に長い年月を要します。例えば、カンキツでは一つの新品種を育成するのに平均で約22年かかっています。また、果樹は植物体が大きく圃場に植え付けられる本数には限りがあるため、多数の植物体を選抜対象にすることができず、選抜基準を超える植物体の獲得率が非常に低いのも現状です。

近年、ゲノム情報を活用した品種改良（育種）法の一つであるゲノミックセレクション（Genomic Selection: GS）が注目され、家畜育種の分野を中心に実用化が進んでいます。GSとは、品種間における特性の違いと大量のDNAの違いの情報（DNAマーカー）との関係を数式で表した予測モデルを作成しておくことで、新たに作出した個体についてもDNAマーカーの情報から特性を予測して選抜する方法です。果樹の場合、芽生えの段階でもDNAマーカーの情報を得られるため、GSを利用すれば、果実ができるのを待たずに望ましい果実特性を持つと予測された植物体を選抜することができるはずです（図）。そこで私たちはGSの果樹育種への応用を目指し、その有効性を検証しました。

農研機構カンキツ研究拠点の育種プログラムで実際に使用

されているカンキツの品種群から収集されたDNAマーカーと多数の果実特性の情報を用いて予測モデルを作成しました。果実重、果実の硬さ、果皮の色、果皮のむきやすさについては精度良く（観測値と予測値の相関係数（ r ）が0.7より大きい）予測することができ、GSがカンキツの品種改良に有用であることを明らかにしました。GSを利用することで芽生えの段階で優れた植物体を選抜できるため、新品種の育成効率を向上させることができます。今後はGSの精度をさらに向上させるために、予測モデルを工夫するほか、果実特性の評価方法を高度化していく予定です。

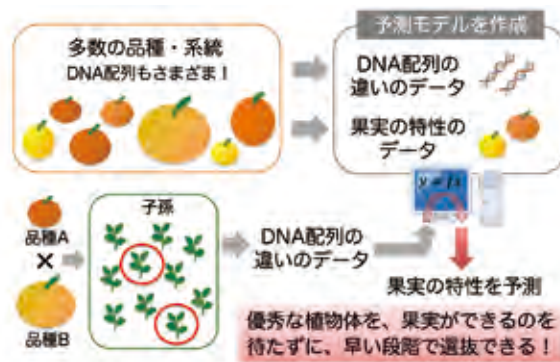


図. 果樹におけるゲノミックセレクション

「就職支援・両立支援について」

戸定会副会長 齋藤 京子 (園昭51)

今や園芸学部の学生の約半数は女性です。そこで、戸定祭のハイブリッドシンポとして、「やりたい仕事でのびのび共働き『ジェンダーギャップに対する現役学生と同窓生の認識ギャップを考える』」を2022年11月5日に開催しました。第1部は、櫻井彩乃氏 (#男女共同参画ってなんですか代表) の講演。第2部は、戸定会会員で卒業後5年~15年程度の梅山幸子氏 (味の素株式会社)、小池陽子氏 (株式会社サカタのタネ)、田口香織氏 (農林水産省) からの話題提供。内容は、①学生の時にやっておきたいこと、②就職先を決める時に必要なこと、③仕事を続けていくために、ワーク・ライフ・バランスをどうとっているかなど。

①では視野を広く海外経験やインターンシップも大事。②では自分の好きなもの、やりたいことを貫く。③では自分一人で頑張りすぎない、パートナーとうまく分担、会社の両立支援制度を活用など、園芸学部の就職活動中の学生はもとより、卒業後間もない戸定会会員にも役に立つ話でした。

更に、2023年1月には、中谷友紀氏 (全国農業協同組合連合会) から上記①、②、③に沿った話題提供をオンラインでし

ていただきました。就職を考える上で非常に参考になるお話でした。いずれも、千葉大学の全学部の学生と教職員だけが視聴できる学内限定システムを活用し、オンライン視聴が限定期間できるようにしました。

「政府の女性版骨太の方針2023」にもありますように、『男女ともにライフイベントとキャリア形成を両立できる環境づくり』を戸定会会員の知識や経験などのお力を借りながら、在校生に提供したり、就業継続のノウハウを戸定会会員に共有できるように取り組みをこれからも続けていきたいと思っています。



シンポジウムの案内版



会場の様子

戸定会より寄付のお願い

戸定会の重要な活動資源として一口1,000円から寄付金をお願いします。寄付は同封の郵便振込用紙でお願いいたします。

次年度の会報にて、寄付者名簿を掲載させていただきます。

なお、20,000円以上のご寄付をいただいた方には、お礼の品を贈呈します。①~③からお選びください。



1

ジャム、ハチミツ、コーヒーセット
環境健康フィールド科学センターで収穫された果実のジャムと千葉大産純粋ハチミツ及びバナナ千葉大コーヒーのセット



2

リンゴ
環境健康フィールド科学センター沼田農場産のリンゴふじ (12月上旬以降発送予定*数に限りがあります)



3

お酒 オリジナルラベルの一例
守屋千葉大学名誉教授 (横綱審議委員会前委員長) のご実家守屋酒造の純米大吟醸と辛口純米酒のセット (オリジナルラベル)

編集後記

坂を上り園芸学部に入ると、梅雨前だというのにたくさんのセミの声に驚きました。ここを上ってくる度にこの場所には良い気が流れていると感じます。梅雨明け後はあちこちで猛暑日が続いております。夏が過ぎ、過ぎやすい季節になった頃にこの会報ができあがりますので、多くの会員の皆様にページをめくっていただけたらと思っています。

(佐藤 菜穂子:園昭53)

今回の「学生の声」は、「何を学びたくて入学したか、入学後はどのような専門内容や研究に力を入れて取り組んでいるか」についてお願いしました。拝見すると、学科・コースの専門内容に関心があって入学し、入学後も意欲的に、より専門性の高い内容に取り組んでいることが書かれてありました。関心を持って主体的に取り組んでくれていることはとてもうれしいことです。今後もよりよい学びの場を提供できるよう努めたいと思います。

(三島 孔明)

今回、在校生のページでは、本学部・研究科に入学した理由を紹介しています。思えば研究室の学生に、そのようなことを聞くことはあまりありませんでした。どのような原稿が返ってくるのか楽しみにしていましたが、短い文章の中に高い問題意識や強い専門性への関心が書かれており、正直、とても驚きました。会報には様々なテーマの記事が掲載されています。皆様にとっても、何かよい情報をお届けできていれば幸いです。

(丸山 敦史)

今年度会報の担当となりました。どうぞよろしく願いいたします。卒業生や在校生に原稿を依頼し、掲載しました。在校生には同窓会の存在を再確認してもらい、卒業生には学生時代を振り返ってもらう機会になったのではないかと思います。皆様におかれましては、活躍する卒業生や在校生の様子を知っていただき、引き続きご支援いただけたら幸いです。

(佐々 英徳)

大学の授業や行事の多くが対面・オンサイト形式となり、研究室にも研究活動に勤しむ学生の活気が戻ったように感じます。コロナ禍を経て気づくことや考えさせられることも多くありました。コミュニケーションやライフスタイルに起きたさまざまな変化を活かして、より良い学びの場へと進化していく園芸学部の様子を今後もお伝えしていければと思います。

(相馬 亜希子)

皆様ご存知でしょうか? NHKの朝の「らんまん」の植物学者の牧野富太郎氏が千葉大学園芸学部の前身となる千葉県立園芸専門学校だった明治44年から約3年間、講師として植物分類学を教えていたことを。私は前園芸学部長の小林先生から教えて頂きました。編集後記として取り上げさせていただきます。来年度の戸定会報には掘り下げた記事を書きたいと思っています。

(加藤 一郎:会長)

表紙写真: シロイヌナズナ (*Arabidopsis thaliana*) のオス・メス生殖細胞の顕微鏡像。/ 提供: 井川智子准教授 (植物細胞工学研究室)

上: 右側写真から葯 (明視野)、花粉 (精細胞の膜と核をそれぞれ緑色・赤色蛍光タンパク質で標識)。

下: 右側写真から雌蕊と胚珠 (明視野)、受精後の接合子と胚乳細胞 (接合子の膜と核をそれぞれ緑色・赤色蛍光タンパク質で標識; 胚乳核を赤色蛍光タンパク質で標識)